

雑木林からの発信

雑木林はきもちいいな！もっと身近にあればいいな！



14/30

焚火

K. Horio 1997

平成12年12月
苫東・育林コンペ事務局

序にかえて

雑木林は思えば不思議な空間だった。
苫東工業用地の緩衝緑地としてあてがわれるはずだった広葉樹2次林が、
諸条件が整わず実力を出さずにいる内に、
取り囲む事態、いわゆる時代というものが変化して
空間は、ひとり産業だけのものではなくなっていった。

林はしかし、消滅を万が一免れたとしてもしても、もう、農業と林業の元には
すんなり戻ることや納まることはないだろう。

まして

ホンモノの一次産業のケアによってあずましいプロフィールを見せることは
ないのだろうと私たちは思う。

だからせめて、

次のステージのために人と緑・雑木林との関わりの入り口はこの辺、と
もっともっと見えるようにしていきたい。
今度は腕に覚えのある市民のケアによって。

苫東の緑が「工業専用地域」というまちづくり計画の中にあっただのは
幸이었다。

なぜなら、ふんだんな緑地を都市計画の中でどう活かしていくかが
21世紀の知恵比べで

人はその都市計画で環境を規定していくからだ。

都市計画、あるいはこれからの景域計画の中で議論しよう。

本当に市民が欲する緑はこういうものだ！……と。

あずましい暮らしこそ市民の願い、すべての基本で、そこは行政も市民もないのだ、と。

育林コンペはいつか息が切れるかも知れない。

が、小さな社会実験は必要度を弱めないだろう。

なぜなら、暮らしの中の本当の緑を

多くの市民が気づき獲得しようと動き出すのはきっとこれからだから。
そのときまでに私たちは、一人でできる「山仕事の達人」になりたい。
身近な緑のどこでも、森づくりの旗を立てられるように。

目 次

序にかえて

苫東・育林コンペのはじまり コーディネーター 草苺 健

参加グループの紹介

.....ホームページ「苫東の雑木林」から

参加グループ代表のメッセージ

濱田 智子 / レディスネットワーク21

椿 勇喜 / 苫小牧レクリエーション協会

孫田 敏 / 札幌雑木林ファンクラブ

浪花 彰彦 / 北大チーム

草苺 健 / 苫東地区森林愛護組合

育林コンペの第1ステージ審査会にて
(オールデイ・レポート)

苫東・育林コンペのはじまり

～「美しい森づくり」が身近な緑を再現する～

雑木林・育林コンペコーディネーター

草苅 健（苫小牧市）

いつのまにか、わたしたちの身の回りから緑がなくなった……。これはわたしの住む地域だけでなく日本全体が20世紀に行き着いた環境の現状です。都市化とスプロールの過程で、十分な緑を内部に持たなかった、根元的には持つ気になれなかったのが原因だと言えます。それほどまでに、身の回りの緑との縁がうすれ、生活の快適さを下支える緑をあきらめ利便と効率に走ったのが、残念ながら経済成長期の日本の歩みでした。

わたしたちは、身の回りに緑を呼び戻しもう一度本当に快適な暮らしは緑と一緒に生まれるということにみんなで気付くために、まずもともとある郷土の林を、本来の美しさに戻すことを始めました。

幸い、わたしたちの住む地域～日本の最北の島：北海道の南部「苫小牧市」～の外縁には、40年ほど前に伐採された広葉樹の2次林がまだ多く残されています。林で最も優先するのは萌芽を繰り返すコナラですが、コナラの群落はこの一体が日本の北限でもありません。太平洋から6kmの距離にあり、標高は25m以下、地形は平坦、平均気温約7.5度、冬の積雪30cm以下、平年の霧日数44日。これが地域の地理と気象のプロフィールです。一帯500haの林の一角を借りて、わたしたちは、まず、混みすぎた林のツルを切り、枯れ木を片づけ、本数を少しずつ減らす作業を始めました。ここに、本来の美しい林のモデルをつくるためです。

美しさを目指す方法のひとつとして、グループごとに0.5haずつエリアをもって合計3haの林で保育のコンペをすることにしました。学生のグループ、女性だけのグループ、札幌のグループ、そして林業に携わっているプロのグループなど6グループが、週末などに家族や友人も伴いながら雑木林のケアセンターである小さなログハウスを足がかりに、近くの自分たちのフィールドに向かいます。コンペのルールは、劣勢のものから抜くことと、ha1500本を目途にすること、むやみにたき火をしないことなど、比較的簡単なことばかり。

あとは、ピザづくり、バーベキュー、炭焼きの研修会、きのこの菌の植え付けと栽培、山菜取りとクッキング、隣接する沼でのカヌーなど、家族ぐるみで遊びながらの森づくりというのが実態です。失ってしまった緑とのつき合いの入り口を、まず「林の美しさと遊び」に求めることにした訳で、その結果として保全と感動がついてくるという仕組みです。

99年の11月に、ここ2年間の保育作業結果の印象について審査会を開きました。審査を依頼したのは、野生動物の研究者、森の癒しに造詣の深い精神科医、林業行政の担当

者の3人です。審査では女性チームがトップに選ばれましたが、「育林コンペ competition」と呼んできたものは、実はコンパ comparison と呼ぶべき穏やかなもので、それが順当な所だと言うことが分かりました。

この林には実はもうひとつの役割があります。それは日本最大の哺乳動物ヒグマが、支笏湖方面と日高方面を移動するときのコリドーに使っているのです。1995年、この近くの森で捕獲し発信器をつけた雄のヒグマ「トラジロー」が初めて移動の情報を提供してくれ、今も研究者が追跡しています。このほか、この森にはエゾシカやモモンガなどのほか、クマゲラや少なくともワシタカ類も生息しています。ウトナイのバードサンクチュアリも数キロの距離にあるなど、これら野生生物との共存も視野に入れて林のあり方を考えていくことにしています。

ただ、ここでわたしがもっとも関係を深くしておきたいのは、他ならない「人」と「雑木林」です。美しさとなごみと、人の心に反射する林のすべてをここでできるだけ体験し、そしてできるだけ克明に日記のように記録していきたい。みんなの何気なく記された言葉の中に、きっとキーワードが見えてくるかも知れません。あるいはすでに出されているのかも知れません。

明治以来、日本に赴任する外交官が、日本の歴史や日本人の自然観を知る上での必読の教養書とされる『日本史』(The History of Japan ; 著者 Engelbert Kaempfer)が1727年、ロンドンで出版されました。ケンペルは長崎のオランダ商館の医師として在日したのですが、江戸幕府との往来に日本の自然風土を見聞し、文化、宗教、産業などについて記述したものです。この中でケンペルは、沿道の水田や畑、林は手入れされリサイクルされ、街並みの通路はよく掃き清められ……、と当時の日本の姿を記しています(「森とつきあう」渡邊定元)。

荒廃してしまった雑木林も、地域の片隅の小さな活動からケンペルの見たような美しい緑の「ガーデン・アイランズ」に近づきたいという気持ちは、これからの日本人ひとりひとりの心の中に眠っており、やがて切実な願望になっていくのではないかとわたしは思いますが、昨今、国もランドデザインの柱のひとつに「美しい国づくり」というテーマをあげ始めました。野生生物との共生の道を探りながら、美しく快適な生活環境を身近に獲得するために、わたしたちの作業が一步を踏み出すことになればと念じます。

参加グループの紹介

……ホームページ「苦東の雑木林」から

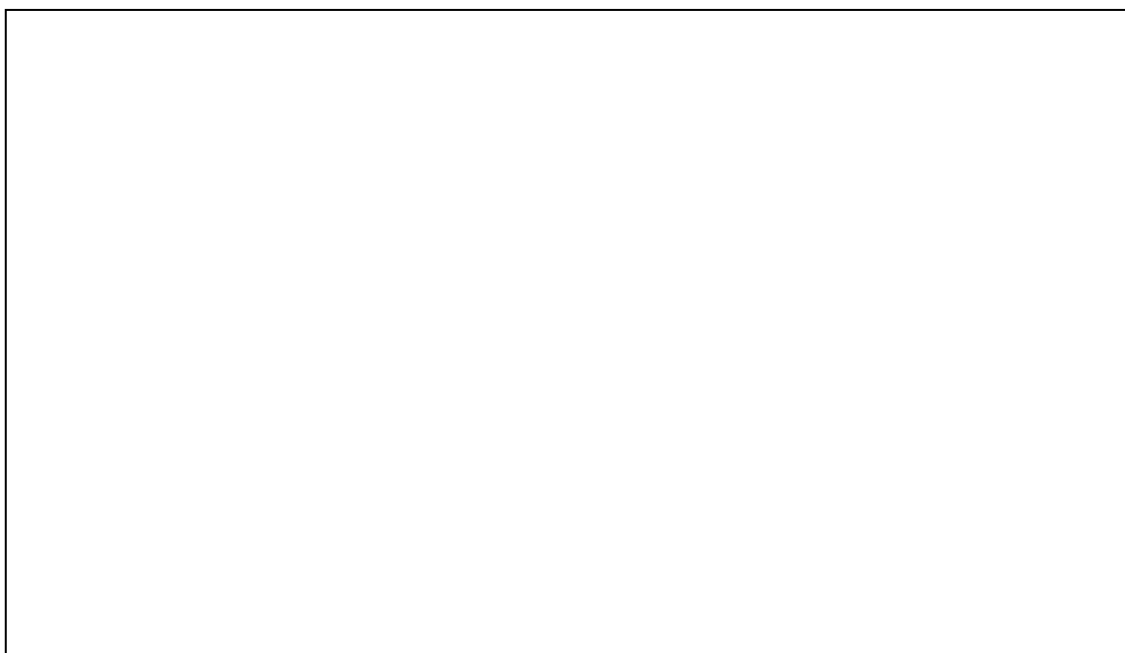
育林コンペはおもしろい！！

苦東地区森林愛護組合が主催する育林コンペが続いています。

育林コンペというのは、期間と場所を限定して苦東の雑木林を保育し、その仕上がりの美しさ、作業の楽しさなど林のトータルな完成度を競おうというもので、平成9年の10月に始めた地域の活動です。

場 所 苦東の東側の緑地
(備蓄基地の北側で、かつて平木沼緑地と呼んだところ)

周辺地図



期 間 第1ステージ：平成9年10月から
平成11年11月まで
第2ステージ：平成11年11月から
平成13年11月まで

林の概況 コナラを主体とした広葉樹2次林

- ・直径6cm～25cmくらい
- ・グループごとの面積は5000㎡

基本的なスタンス 「継続する快適な林をつくる」

コンペの方法 最低限の保育の決まりを確認後、ある程度自由度を持ってレクリエーション的にすすめます。コンペの評価基準は厳密なものではありませんが、健全で親しみやすく、より美しいと感じられる林に仕上がっていくと自ずと高い評価がついてくるでしょう。

参加グループの紹介

グループ名

LN21



プロフィール

レディスネットワーク21。全道の女性の森林関係者のグループで作業エリアは「おこもり広場」と命名。ご主人も子供もいっしょ。ブロック世話人は濱田智子さん。

北大演習林



苫小牧地方演習林のスタッフと北大の学生のグループ。作業は夕方遅くまで続け、理論的。人海戦術で作業は意外と早い。女性が多い。リーダーは浪花彰彦さん。

苫小牧レクリエーション協会



文字どおり、林で森林レク活動のプログラムの開発と実践をめざす。アウトドアのノウハウが満載で目をみはるグループ。98年秋から保育開始。代表は椿勇喜さん。

札幌雑木林ファンクラブ



札幌の森好きの人が業種をこえて集まった。札幌から1時間ちょっとかかるけど、98年冬は作業がほぼ毎月行われました。ノコギリだけを使った間伐の見本になります。本格始動は98年。世話役は孫田敏さん。

苫東地区森林愛護組合



苫東の立地企業と市民のエリア。ファミリーでわいわいにぎやかに保育。子供たちも働き者で、春はまず平木沼のカヌーでスタート。担当エリアが偶然、沼の前なのです。元気印のおかあさんたちも大活躍。ピザ窯づくりを手がけ、薪で焼くピザを完全マスター。バームクーヘンも体験済み。リーダーは草苅で、コンペのコーディネーターをかねます。

いぶり雑木林懇話会



地域で森づくりに関わる人たちのグループ。特に雑木林に魅せられており、精力的に動くいわばプロ集団。代表は本田弘さん、わたしはその事務局を担当しています。

参加グループ代表のメッセージ

子宝森で見た夢は...

「お・こ・もり広場」世話人代表 濱田智子

育林コンペにエントリーすることになった平成9年夏、フィールドを預かるに当たって、この機会を利用して是非やってみたいと思っていたことがいくつかありました。当初描いたそれらの構想などを思い起こしつつ、2年余りの活動を振り返ってみたいと思います。

林業技術はどこ？

技師や指導員という職名を与えられながら、実地での技術研鑽の機会の乏しい私たちにとって、フィールドを持てるということは非常に魅力的なことでした。自分と同じような林業職の女性（ばかりじゃないけれど）を集めて、技術研修の場にしよう！これが一つ目の構想でした。

最初は気合を入れて、標準地を設けて毎木調査を行いました。しかし、回を重ねるうちに調査野帳はどこへやら...。選木研修会の構想もどこへやら...。結局は、とにかく立木密度が高すぎるからと、ひたすら枯損木と小径木（主にはサワシバ、アズキナシなど）の本数を落とす作業に終始していました。2年目が終わろうという頃になって、ようやく林全体が歩きやすくなり、いよいよ上層木にも手をつけようと、チェーンソー実地訓練となりました（でも私は欠席）。そしていよいよ3年目、最後の仕上げとして林道からの見た目を良くしようと、さらに本数を落とし（助っ人のチェーンソーマンが大活躍）、林縁の草刈りなどを実施しました。

これらの作業で技術研修になったのかと考えると、はて？（ただし当初の調査で、樹種も判別できない林業サギ師もいたことを考えると、多少の学習効果はあったのかも）除伐については、自分たちだけでは選木基準があいまいで、自信の無さともどかしさを常に抱きながらの作業でした。広葉樹林施業の難しさを味わう研修には、なったでしょうか。

ところで、技術というのは、それを必要とする明確な目標があって初めて生きてくるものなのに、私は伐採後の森林の姿や保残木の形質に明確な目標を描いていなかったということに、後になって気がつきました。みんなで作業するという行為その物が目的だったように思います。そんな森林施業に、技術などあろうはずがありません。この経験は、私の仕事である林業普及活動にも、一つの示唆を与えられました。それは、明確な目標を持たない客体にとつて、林業技術は無用の長物！ってことだと思います。

おんな子供のにぎわい

もう1つの構想は、「お・こ・もり広場」(おんな子供による森づくりの広場)のネーミングの通り、女性や子供主体の活動の場にしたい！ということでした。

おそまつながら家に帰れば私も母親です。週末森に通うとなると、やはり子連れのできる活動の方が無理がありません。そればかりでなく、私自身幼い頃に裏山で遊んだ郷愁を暖めて大人になったので、幼児期の子供たちに自分と同じような森林体験をたくさんさせたい！という思いを強く持っています。ちょうど苫小牧に来て2年たち、同世代の知友人がたくさんできたので、そんな母親と子供たちを誘って森へ行こう！とっていました。

1年目は「リース作りの材料を集めよう」という企画を実行したところ7～8組の親子が参加してくれ、たくさんのツルや木の実を収穫した後、落ち葉で冠やスタンドグラス作りを楽しんでもらいました。私としては当初、このようなお母さんや子供たちを保育作業の担い手とは考えていなかったのですが、2年目の企画は森の中でゲームを...と思って現場の準備に出かけたのですが、混み入った林を見ているうちに作業の進行が気になってきて、「ゲームどころじゃない、みんなにも除伐作業をしてもらおう」と、伐採対象木にテープを結びました。翌日集まった親子には、のこぎりを貸出して、印のついた木を片っ端から伐ってもらい、柴を運んでたき火をし、焼きイモを楽しみました。これが予想以上に大好評！で「今度はいつやるの？」「また来てもいい？」と、皆さんリピーターになってしまいました。ゲームや森林浴もいいけれど、やっぱり木を伐る醍醐味は、一度知ったらやみつきになるようです。

これ以外にも、北海道の技術系職場の女性たちのグループに参加を募ったり、苫小牧子供劇場のお母さんと子供たちや、口コミで誘って来てくれた知人の親子連れなど、「お・こ・もり広場」に来てくれた人数は、子供も含めると80名くらいになります。その大半が女性や親子連れだったことを振り返ると、まさに当初のネーミング通り、女子供のにぎわいでした。おまけにその実態は何と！子宝森。我が家の3番目も含めて、「お・こ・もり広場」の作業に参加した母親から生まれた赤ちゃんは、9人もいるのです！

伐ることから始まる森づくり

さて3つめは、「木を伐ることも森を育てることなんだよ！」ということを伝えたいと思っていたことです。

世間一般には、伐採イコール自然破壊というイメージを抱いている人が少なくありません。特にそうした固定観念は、森林に無関心な人よりも、自然への関心や保護意識が一般の人よりもちょっとばかり高い人たちに強いという印象を受けます。地球的規模での森林減少や林地開発行為と混同されているような気もするし、林業技術や保育作業への認識不足や誤

解からきているようにも思えます。

そのような伐採否定と共に厄介なのが植樹信仰です。木を植えさえすれば緑豊かな環境を取り戻せるという誤解があるように感じます。木を植えるという行為は、自然生態系のリズムを考えると、むしろ逆らった行為とも言えます。人間が植えた木は、放っておいて勝手に大きくなるのではなく、元々その場所になかったものを植えるわけですから、育てるための手間がかかります(だから人工林の間伐遅れが林業上の大きな課題なのに...)。その辺の事情を考慮せずに、木を植えたいという信仰が一般的に根強いのではないのでしょうか。育林コンペのスタート時点、道新の記者の取材に応じた際、「木を植えることも考えていますか？」という質問をされ、妙な感じがしたものです。こんなに木があるのに何故植える必要があるわけ？？

やっぱり植樹信仰があるのかな...と。

住民参加による植樹祭等は大変結構なことです、多くの自治体担当者は、植えた後の樹木の管理に泣いています。そうした現状を目の当たりにする度に私は、植樹ばかりが森づくりのスタートではないということ、一般にPRできたらと思っていました。皆伐したら植えなければ再生できない森林もありますが、胆振の広葉樹林は、伐採と天然更新とを繰り返すことのできる森林です。そのような森林に対しては、伐採することによって残った樹木の成長を促し、森林全体を育てていくという方法が、自然のリズムに合った森づくりの方法なのだということ、を伝えたかったのです(この場合、木材生産を目的とする人工林育成とは目的が違うので、誤解のないように。私は林業屋なので、林業生産活動や針葉樹造林を否定しません！) 要は、植えるばかりが能じゃない、目的と地域の条件に合った森づくりをしようということです。

幸い育林コンペの現場へ向かう途中の林は、林道を境に手入れした林とそうでない林との違いが一目瞭然なので、初めて来てくれた人には趣旨をていねいに説明し、林相の違いを確かめてもらった上で作業に参加してもらいました。広く一般には言いませんが、日常的に森林や林業と無関係の人たちにも多数来ていただけたことが、成果だったのではないかと感じています。

手前勝手に振り返って...

全体を振り返ってみると、「森林と人間とのより良い関係づくり」という私自身のライフテーマに、自ら身を置くことのできた2年余りだったと思います。

ちょうどエントリーした翌春は産休中だったので、ちよくちよく現場を訪れ(出産当日も行って、夜に陣痛が始まり翌朝産まれたのです)、作業シーズン以外の春から夏にかけての林の様子も十分に堪能することができました。おかげで、四季を通じて一つの林とじっくり向き合うことができ、とても懐かしく満ち足りた気分を味わわせてもらいました。こうした体験が、

私の生活に豊かな時間をもたらしてくれたことは言うまでもありませんが、「お・こ・もり広場」の木々たちにとっても、豊かな育ちを与えたように思えてなりません。作業に入る前は、立木密度が高く枯損木の多い林でしたが、伐採することによって空間が生まれ、林床にも日光が届き、伐根からは旺盛な萌芽がたくさん伸びています。ひっそりと生きていた林に、躍動する生命の喜びを提供したような気がするのです(ちょっと大袈裟ですが...)。そんな手前勝手な夢を見ながら、自分の働きかけによる森林の変化を見届けてゆくのも、これからの楽しみです。

最後に、こうした機会を提供して下さった草苺さんと、一緒に作業を楽しんでくれた皆様方に、この場をお借りして心から感謝の意を表したいと思います。本当にありがとうございました。

「森に思うこと」

苫小牧レクリエーション協会 榎 勇喜

あっという間に2年間で過ぎてしまった気がします。当初は「あれもやりたい」「これもやりたい」という気持ちだけは大盛りのラーメンみたいなもので、構想だけは大風呂敷を広げたものの、結局できたことはわずかばかり.....。

でもそんな反省の念とはべつに、他の団体の出来上がりや活動ぶりを聞いたりすると、やはり基本的な部分で森に集う仲間の考えは共通しているという感想を持ちました。

私たちの目指すレクリエーション活動は、レ・クリエーション(Re-Creation)であるといわれています。創造的な日常活動(クリエーション)につかれば、レクリエーションをすることによって再び(り)、日常活動に戻っていく、これがレク活動の真髄とも言えます。

日々のいろいろな仕事や人間関係に疲れたら、森に入って木を切り汗を流し、たき火にあたり、心地よい疲労感を覚えながら帰っていく。まさにこの2年間はレク活動そのものだった気がします。

残念だったことは、いつも9月の最終土曜日で実施される「たるまえサン・フェスティバル」で境界の会員が全勢力を使い果たし、肝心要の紅葉の時期に森に足を運べなかったことです。

今年(99年)はサン・フェスの前に一度徹底的にチェーンソーを使用して太めの木を切っておき、サン・フェス終了後にもう一度片づけをする予定でございました。

9/18に行った折りには、まだまだ木は青々としていました。人数が少なかったせいもあり2時間程度の作業を壮そうに切り上げ、ログ・ハウスの前で焼き肉パーティとなりましたが、大きなスズメバチの集団の大歓迎を受けました。ビールの空き缶やら肉にも関

心を示していましたが、自分たちの範疇でないと判ったのか、周りを飛び回るだけでだれも刺されませんでした。

* 育林コンペのアンケートの回答を以下に記述しておきます。

こんな林にしたかった！

木に触れたり、花を楽しんだり紅葉を楽しんだり、また昆虫達とも出会えるような林を目指しました。

こんな作業をしました！

低い灌木や枯れた枝をノコで切ったり、株立ちしている木をチェーンソーで切り倒しました。

もとの林と今の林の様子

作業を始めた頃は灌木やツルでうっそうとしていた森もすっきりしました。作業していても切り倒した木を運び出すことさえ大変でしたが、移動のための空間ができました。

2年間の作業や林とのつき合いに関する感想

なかなかメンバーの日程が折り合わず、作業できた回数はわずかでしたが、森に来る度にきれいな空気に触れて、元気を回復しては家に帰れたと思います。

次のステージに向けた抱負

いつも紅葉のきれいな時期に、ほかの行事の活動で勢力を使い果たし森に来られたためしがありません。来年（平成12年）こそは春の新緑と秋の紅葉を楽しめる日程を早めに設定したいと思います。

育林コンペは一粒の麦

札幌雑木林ファンクラブ 孫田 敏

霧雨のような細かい雨粒がまるで体に纏いつくように降っています。ここは「シリ・エ・トク」、空と海が境がないようにどんよりと一体となっています。地の果ての地とはよくも名づけたものです。目を山に向けると、海端から切り立った山腹が、仰ぎ見なければならぬようにそそり立ち、そこにはダケカンバやトドマツなどからなる針広混交林が広がっているように見えます。今日は雲が低く、その広がりまるで無限のように思えてきます。そして、人との関わりを拒否しているかのようにも。森や林、広い北海道には様々な形態があります。この知床の森を見ていると、苦東の林の様子がまるで遠い国の森のように感じられます。（ここまでは7月に書いています。）

長々とこの原稿を書くのをサボり、早半年以上が過ぎてしまいました。3年間の育林コンペ、これは私たち札幌からのグループ「雑木林ファンクラブ」にとって何だったのでしょうか？

3年間といいながらも、最初に私事^{わたくしごと}で躓いて1年目はほとんど活動をしませんでした。「雑木林ファンクラブ」という素敵な名前を草苺さんから付けていただいたにもかかわらず、実は組織として動いているというほどのものはありません。私の知り合いに声を掛けて、それにのって来た人が会員ということになります。総勢10人をちょっと超えるぐらいの人たちです。

夏場は暑いので、作業は冬の雪が積もったときだけ。火を囲むことと、刃物を持つことを楽しみに集まって来た人たちです。(勝手に私がそう思っているだけ)その中で実際に森の木を切ったことがある人は、たぶんたった一人だったでしょう。中には木を切るなんてかわいそうといていた人もいたぐらいです。初めはどんな木を木っていいのやら迷っていつ時間の方が長かったでしょうか。草苺さんには一応の基準を教えてもらっていたのですが、現実に林の木を目の前にするとこれは切った方がいいのだろうか、残した方がいいのだろうかと悩むことしきりです。最初の1年は迷いながら、遠慮しながら木を切っていました。

かなり大胆に切るようになったのは2冬目からでした。私達のグループは誰もチェーンソーを持っていないということから、いっそのこと手鋸だけで間伐を進めていこうということになりました。最初切っていたのは直径7・8cm程度の木ばかり。しかし2年目ともなると大胆になり、直径20cm近くもある木に挑戦する人もでてきます。あくまで手鋸で。寒い冬の最中でも汗びっしょりになりながら作業を進めました。伐倒から玉切りに至るまで一本の木は一人で処理していたのですが、いつのころから集団で作業するようになってきました。玉切りは「解体」と称して数人で玉切りをするようになってきました。林業の作業班が自然に形作られる様を目の前に見たような気がしました。

主要な構成種であるコナラも随分切りました。ちょっと切りすぎたかなと思ったくらいですが、あとでグループのBさんの一言。「生きているようだけれど、ほとんど枯れている。」私もそのあとよく見てみると、切ったコナラの大半は立ち枯れしていたものでした。下枝が枯れ上がっていて、上の方の枝の冬芽が生きているかどうかよく見えない。このため切るまではよくわからなかったのだと思います。随分間伐したと思い込んでいたのが、実は整理伐に留まっていたということがわかったのは、もう春も間近のことでした。見た目には武蔵野を思わせるようなコナラ林ですが、実は結構病んでいるのかもしれない。

切った木は大半がそのまま野積みにしたままです。もったいないと思っていたら。前述のBさんが家の薪に使うから持っていくと申し出てくれました。実際には切った量のほんお少しですが、多少は「地産地消」をすることができました。切った木を野積みのしておくと昆虫の棲み家になり、生態系には良いという考え方もできるのですが、ちょっと風倒で、というよりはずっと多い量です。本来は責任をもって処理しなければならないことなのでしょう。今回はそんな視点を持ったのはほとんど最後のころでした。次回からは。課題です。

さて表題の話しです。

私達のグループの活動はあまり活発なものではありませんでした。(懺悔)しかし、この体験は次へのステップとなったのです。Bさんは札幌の常盤で「カッコウの里を語る会」を主催しています。これまでは地元の自然を守ろうということや芸術の森周辺の清掃活動をしています。この会でも今年空沼に国有林の一部を借りました。すでに契約も終えました。活動の場を得、今年は森の中の幼稚樹をマーキングしておき、寒くなったら掘りあげて植栽用のポット苗を作る予定でいるそうです。

木を切るなんてかわいそうといていた Yさんは、木を切るという林の付き合い方ではなく、木を切られてしまい土地形状も変わってしまったような原野状態のところ、木を植え始め、いずれは森を、とがんばっています。

また私自身は、札幌にできた「北の里山の会」(今年の5月にでき、草苅さんに基調講演をいただいた)で活動を開始する準備をしているところです。札幌市有林の一部を借り、里山作りを実際にやってみようとしています。まだ活動の準備期間ですが、いずれ苦東の森に勝るとも劣らぬような森にしていきたいと思っています。

決して根を詰めて作業はしてこなかった参加者面々でしたが、そのあとには様々な活動を始めることになりました。札幌のことしか知りませんが、この育林コンペを通じて感じた色々な思いを何らかの形で外に向けて始めていこうとしましたのです。

私達は育林コンペの中では、決して優秀な成績を収めることはできませんでしたが、育林コンペの中に、これからの自分達の進む道筋を見つけることができました。これがこの表題の由来です。これからも場所こそ違え、体験できる森作りを進めていこうと思っています。これから色々な場に出会うことができるでしょう。でもこの育林コンペの体験をもっと、もっと広げて行きたいと考えています。

「一粒の麦も死なずんば」とうことですが、育林コンペは死ななくとも新しい動きの素になります。今はまた活動が低迷していますが、いずれまた。

「雑木林で私が得たもの」

北大チーム 浪花 彰彦
2000/4/2 (北大苫小牧演習林技官)

1. はじめに

北大チームは当初、北大苫小牧演習林の職員(当時の林長であった青井さん、山のベテランである林業技能補佐員の及川さん、そして新米の技官であった私)と、早稲田さんを中心とする北大農学部森林科学科の学生と大学院生、その連合チームとしてスタートしました。

その後、演習林の職員は多忙のためなかなか活動に参加出来なくなってきたのですが、学生達は卒業に伴うメンバーの世代交代を繰り返しながら、徐々に仲間を広げ、現在の北大チームの活動基盤を作り上げてきました。

中心メンバーが少しずつ入れ替わりながらも、チームの特色が引き継がれていくというのは、他のチームにはない北大チームだけの特徴だと思います。

幸いなことに私は、チームの立ち上げからこれまでの間、ずっと活動に関わってくることができたのですが、とうとうこの4月から転勤のため北大チームを「卒業」する事になりました。

そこで、これまでの活動を振り返ってみようと思います。

ここで私は、北大チームが育林コンペに向けて、どのように雑木林の手入れを行ってきたかという点を中心に、簡単にまとめてみようと思います。

実は北大チームの活動のもう一つの大きな柱として、楽器の演奏やネイチャークラフト、野外料理といった様々な「遊び」があるのですが、そのことについては学生メンバーから紹介してもらえます。

私の方はいささか固い話になりますが、しばらくお付き合い下さい。

2. 育林コンペに向けて ~北大チームの管理目標~

育林コンペに臨むにあたって、我々北大チームは、次のような基本方針を立てました。

- 1) 大学で学んだ専門知識を活かして、従来の林業とはひと味違った、生物多様性を増やすような森林管理の方法を実践してみる
「試みの場」としての森づくり

- 2) 教室の中では学べないような、森作りに関する実践的な知識を
しっかり身につける。
具体的には、ノコやナタの使い方、樹種の見分け方、間伐の際の選木の仕方など。
「学びの場」としての森づくり

- 3) 森林管理をがんばるばかりではなく、クラフトや料理などの「森の遊び」をしっかりと楽しむ。
「遊びと安らぎの場」としての森づくり

この基本方針を受けて、実際に行った作業を以下に簡単にまとめてみましょう。

3. 実際に行った手入れについて

まず最初に林内を歩き回って、北大チームの管理エリアがどのような林で出来ているか調査しました。

その結果、我々のエリアが林の特徴の違いから、大きく3つの地区に分類できることがわかりました。

各地区の特徴は、次の通りです。

< A地区 >

- ・ 株立ちの本数が多く、曲がりや病気の木が多い
- ・ ツル植物による巻き付きがひどく、樹冠が発達出来ない木が多い
- ・ 全体的に発達が悪い

< B地区 >

- ・ 細い木が非常に高い密度で生えている
- ・ 株立ちの本数は割と少ない

< C地区 >

- ・ 20cm以上の中径木が多い
- ・ B地区の間伐が進んだ感じの林

以上の3地区について、病気にかかった樹や枯れかかった樹の間伐する作業を中心とした手入れを行ってきました。

林の発達が最も悪かったA地区では、曲がりかたしい木や病気の木を強度に間伐し、広く空いた空間で切り株から生えてきた新しい芽(再生萌芽)を育てることにしました。このA地区では、間伐を行った結果、林内が明るくなってササが繁茂し始めたので、多様な林床植物が生えることの出来るようにササ刈りも行いました。

比較的素性の良い、細い樹が高い密度で生えているB地区では、林内に十分な光が入り、1本1本の木が十分に枝を張れるように、最上層の樹冠を構成している木を対象に間伐を行いました。

また、結構太い樹が多いC地区では、とりあえず今期の手入れは保留して様子を見ることにしました。

このように我々が行った森の手入れは、広葉樹の間伐が中心だったのですが、伐採する木を選びための独自のルールを、次のように決めました。

- a. 本数の少ない樹種はなるべく残す。
樹種の多様性を確保する
- b. 間伐を行う際は樹冠が閉鎖している最上層の木だけを対象にして、

中層のモミジ類や下層の灌木類は切らないようにする。

森林の高さ別の多様性の確保

c. 鳥や動物の食べ物になるような実をつける木はなるべく切らない。

ツル植物も全部切らずに、実をつけるものは残す。

野生動物に配慮した森作り

この選木のためのルールには、森林科学を学んできた私たちの森へのこだわりがよく表れていると思います。

最近では、間伐が進んで比較的広い空間が確保できるようになったA地区の一角を「広場」として、ベンチや木道・ブランコ、刈ったササを利用したササ小屋等を作って、活動の拠点にしています。

4. これからの林の手入れについて

これまでの2年間で、C地区のほとんどとB地区の半分程度、間伐が進みました。

これからは、残った樹の成長や新しい稚樹の発生を見守りながら、残りの地区の間伐を進めていくつもりです。

実際の作業時期としては、間伐を11月から3月までの間、ササ刈りは6月と9月の年2回行います。

その他の時期は、ちょうど春の芽吹きや、紅葉・花の時期などに重なっているため、自然観察などでたっぷり森を楽しむ予定です。

5. まとめにかえて

最後に、私が北大チームと一緒に森に関わってきた中で感じたことを書きます。

最初に北大チームの活動が始まったとき、私の中には「自分たちが大学の森林科学科で学んできた森林の知識を、生きた森林の中で実践してみたい」という気持ちが強くありました。

大学の講義や職場である演習林ではなかなか出来ないような、自由な森林管理の試みをこの苦東の雑木林でやってみたかったのです。

そのために北大チームの初期の活動では、かなり「真面目に」というかストイックに森林の管理方法を考え、2年間で林を改良するための間伐の計画を立てたりしました。

その当時の活動と言えば、ひたすら間伐作業を進めて、切りたおした木をナタで刻んで積んでいくという感じでした。

そんな「林業的な」活動は1年ほど続きましたが、最初の計画ほど作業が進まないことへの焦りと、ただ邪魔な木を切り倒していっただけではあまり楽しくないという思いが強くなり、私自身が雑木林の手入れにあまり魅力を感じなくなった時期もありました。

そんな私たちの活動が大きく変わったのが、活動2年目の春からだったと思います。

新しく入ったメンバーに遊ぶ好きの人たちが多かったため、その春は広葉樹の芽吹きや咲いたばかりの草花の観察などして遊んでばかりだったのですが、ノルマに追われてノコやナタを手にするのをいったん止めて、雑木林の中でのんびり時間を過ごしてみると、私自身、「作業はいっこうに進まないけど、楽しいからまあいいや・・・」という気持ちになりました。

それまでの私にとって苦東の雑木林は、自分の学生時代や職場で得ることが出来なかった、森林の知識を試すための実践の場であり、いわば「努力の場」だったのですが、こうして森の中でのんびり遊ぶことを覚えてからは、月に一回森で思いっきり遊んで、日頃の疲れやストレスを解消することのできる「遊びの場」へと変わっていったように思います。

私もいまではすっかりお気楽になってしまい、雑木林の手入れについても、あくまで森での「遊び」の一つとして、自分たちが楽しめるペースでやっていけば良いのではないかと考えています。

去年までの私であれば、「自然との関わりの中では、真面目さだけでなく遊びの要素も必要である・・・」とこの話を締めくくったところでしょうが、今の私はそんな一般論でなく、私自身で感じた気持ちを正直に書くことで、この文章のまとめにしたいと思います。

苦東の雑木林とつきあった2年あまりの月日で、私は森の中にいろんな楽しいものがあることに気が付きました。

特にこの1年間、北大チームの学生さん達と雑木林の中でのんびり過ごし、時には真面目な話などしたひときは、私にとってすごく大切な時間でした。

こんな風にいるんな人が出会えて、楽しく過ごすことのできる場として、苦東の雑木林がこれからも在り続けてくれることを祈っています。

また雑木林でのんびりしたくなったら、帰ってきます。

また会える時まで、皆さんお元気で。

寄せ書き「参加者のことば」

北大チーム

伐採作業からはじまって、ほだ木でのきのこ栽培や炭焼き。冬のクロカンや焚き火も楽しかった。後半は食べるが多かったかな？また、雑木林を通して得た多くの人とのつながりもかけがえのないものです。たった 0.5ha の雑木林だけど、こんなにもいろいろなものが詰まっているとは・・・本当に驚きです。これから 10 年後、50 年後に雑木林はどんな林になっているんでしょうか？

楽しみは無限に広がっていきます。(早稲田 宏一)

早稲田さんと川嶋さんの誘いで林へ足を運び、活動開始の頃の選木、伐採を楽しみました。苫小牧に引っ越してから休日は都会が恋しくなり、林へは足が向かなくなりました。自分の活動を振り返ると、雨上がりに火をつけてもいまいち燃えない薪のようでした。森の楽しみかたもいろいろ。(北大・演習林 前野華子)

「雑木林と私、、、」

4年から丸3年、苫東の雑木林とつきあってきた。関わり始めと比べると、林に対する感じ方も変わってきた。今ではとても思い入れのある場所になった。今までは森に行くことはあっても、どこか特別な場所に行く気持ちがあったが、苫東の森は行き慣れた場所に気軽に行く感じがする。今回はどんな林になっているのか、何か変わったことはないか、想像しながら出かけた。林の四季を体で感じることもできた。

始めの頃の一生懸命やる作業も楽しかった。一本の木を見立て、慣れないチェーンソーを振るうこともできた。後半の林での遊び、料理、泊まりなどなど、普段大学で研究しているだけではなかなか味わえない貴重な経験もできた。そして何より林に出入りする多くの人たちと出会えたことが、自分に色々なことをもたらしたと思う。今後もここで得た経験を生かして、森林とのつき合い方を考えていきたい。

ちょっとまじめに書きました Ken Kurita

「昔、人と雑木林は生活の中で深く関わり合っていた……。」このことを聞くにつれ、なんて生き活きとした森との関わりかたなのだろう、こういう生活を自分もできるのだろうか、やってみたいなあ、と漠然と考えるようになっていました。そういう中で苫東の雑木林での活動は、森を資源として実感し、森との関わり方の奥深さを垣間見る良い機会となっています。生活と結びつけて森と関わることは、まだまだ遠い世界の話ですが、自分なりの欲求にあった関わり方はできたように思います。木を伐る技術、クラフトづくり、たき火料理、草木染め、木の実で酒やジャムづくりなどなど、身も心も豊かになれる経験をさせてくれ、また、雑木林に足を運ぶ人々が、ふだんの生活ではみられない面をみせてくれるのも、雑木林ならではの力です。これまではいっぱい遊んで、少し施業のことを考えるというような森との関わり方をしていたので、これからはほだ木や薪炭材などを効率的に作り出す施業の方法などを、何年もかけてと森とつきあって実感できるような自分の居場所さがしをやっていきたいです。(吉次 さち恵)

雑木林にしばらくごぶさたしているんですが、始めて行った時、食べることと遊ぶことがどうやらメインとわかり、感動でした。来年は、代替わりがあるようなので卒論にもめげず、主力メンバーとしてがんばりたいです。コジローよりは位は上なので、下克上されないように、気を付けます。(フクイアキコ)

都合がつかず行けない時も多いのですが、いついってもすごく楽しくて有意義な時間が過ごせて、雑木林ってすごいなあと感動しています。フル参加を目標にできるだけ足を運びたいです。(2年目 田中聡子)

最高ですかー？

最高です。

札幌市中央区でのアーバンな生活につかれた心にはやっぱりこれ。雑木林、最高ですね。(少年 S)

30代(みそじ)を越して不況日本で職探し。しながら...、炭焼きするとは思わなかった。なぜだ？

ひたひたと31才のたん生日がやってきて、「あっ！」という間に通り過ぎて行こうとしているのに。

リコーダーの練習をしていたのはなぜなんだ-----あ。

(亀山 哲)

4年生で初めて雑木林に来てから早や2年。あの場に行くと、やりたい事がどんどんできてきます。人のつながりもできて、本当に、雑木林は色々なものが生まれてくる不思議な空間です。(好田 美穂子)

森というものは不思議な空間のように感じます。人間の理解が及ばないようなものが何かあるような気がします。だからまた行ってみようと思うのですかね。

(鈴木雅博)

96年のクマ檻設置に始まり、苫東の林は自分にとってとても思い出深い土地です。平地に広がる森林は、いつみても不思議な風景です。これまであまり活動には参加できませんでしたが、みなさまとのご縁を大事にしたいと思っておりますので、今後とも宜しくお願い致します。(浦田)

M1になってから中心となってこの活動に参加してます。人を集めることの大変さと、自分が本当になにをやりたいかを見つめなおすいい1年でした。(おさむ)

こんにちは、北大森林科学OBの網倉です。先日の苫東育林コンペでは、北大(演習林)チームの皆さんには大変お世話になりました。おかげで大変楽しい週末を過ごすことが出来ました。ありがとうございました。

さて、北大チームの皆さんは活動毎に感想文を書いているということを聞きました。僕もせっかくですので、感想文のようなものを書かせていただきます。

「のようなもの」としたのは、多少かたくるしい「批評」的なものも書いてしまおう、という考えがあるからです。皆さんがこの活動で「楽しむこと」、「遊び」に重点をおいているということは十分承知していますし、とっても良いことだと思います。そして、そういうものだけを追及する活動であるならば、外部からの「批評」というものはまったく意味がない、ということも承知しています。ただ、プレゼンをあれだけ凝ったり、今までの活動を冊子にまとめたりという取り組みを見ると、やっぱり何かしら周囲に向けた活動というか、社会の中で自分たちの活動はいったいどういう意味を持っているのだろうか、というところを模索している姿勢が感じられるわけです。そういうふうに、社会における自分たちの活動の意味みたいなものを考えようとするなら、僕のような初参加者の感想・意見・批評というものも多少役に立つのではないかなあ、と考えています。

まずは純粋に感想から。

雑木林はのんびりできるし落ち着くし、やっぱりいいですね。季節が晩秋だったというのも非常によい感じでした（僕の頭の中では、なぜか雑木林というと秋のイメージが強いのです）。みんなで食べるご飯もうまかったです。北大（演習林）チームは林自体もプレゼンも楽しかったですよ。コンペの順位は準優勝でしたが、インパクトは一番あったと思います。ログハウスでの一夜も、ああいう雰囲気浸れたのはほんと久しぶりなのでごくよかったです。

次に、皆さんの活動に参加させていただいて考えたことを少々書こうと思います。まず、「コンペ」という形でいろんなグループが活動をともにするというのが苦東コンペの一番の特色だと思うんですけど、これは非常に面白い試みです。青井先生（でしたっけ？）も仰っていたように、こういう形態の活動によって個性的な林相がパッチ状にでき、生態学的に見ても良いらしいですし、景観的にもかなり面白いものになっていたのではないかと思います。

また、他のグループと関わることで自分たちのグループの特徴やこだわり、長所・短所を客観的に把握できるということも、こういう活動形態の長所としてあげられると思います。時間とパワーに余力があれば、他のグループとの共同作業なんかをもっと増やしても面白いかもしれません。

他のグループといっしょに活動する、ということも非常に大事なことです。あくまで個々のグループの独自性を保ったまま付き合っていく、ということも同じように重要です。自分たちのアイデンティティを失わず、かつ別のグループのアイデンティティを認めることは、他者との関係を構築するうえできわめて大切です（個人同士の関係でも同じことがいえると思います）。

まあ、なにしろ北大（演習林）グループの活動の中でできた個人同士の繋がり、苫東コンペの活動でできたグループ同士の繋がり、皆さん（僕も含めてですけど）の貴重な財産です。ネットワークの力は偉大です。何か問題（たとえば、苫東コンペ用地が突然開発の対象になったり、とか）が起こったとき、この繋がり非常にものを言うでしょう。

北大（演習林）チームの活動については、そのほとんどをプレゼンとできあがった林の状況から推し量るしかないのです、あまり大きなことは言えません。が、なにしろ「楽しむこと」「遊ぶこと」に重点（というかこれが皆さんの活動のアイデンティティーなのかな）をおいている、というのはすごく魅力的ですね。こうなったら「雑木林の中でどれだけ面白いことができるか」というテーマに極限まで挑戦してほしいような気がします。

あと、これは林政出身の人間だから言うというわけでもないのですが、苫東開発の経緯とか現状とか、そういったものを調べてみるのも有意義だと思います。コンペの代表さんが仰っていたように、苫東開発の方向性によっては皆さんの活動している雑木林は使えなくなる可能性があります。それどころか、皆さんの育てている雑木林そのものが開発の対象になるということだって十分ありえるのです。もしそういう問題が起こったとき、苫東開発の歴史なり今後の方向性なりをみんなで議論しておけば、行政に対案を示すことだって可能なはず（簡単そうに書きましたが、苫東開発は石狩湾振興開発とならぶ道のビッグプロジェクトで、正直な話、一度開発の話が出たらそう簡単に撤回されることはないと思います。ただ、声をあげることは重要です）。それに、苫東開発の経緯を調べていけば、きっと北海道全体の開発の歴史が見えてくると思います（そして日本の歴史・世界の歴史と発展していくわけですね）。まあ、こういう話の方が僕としてはかなり提供できるものがあると思うので、もし興味があれば声をかけてくださいね。

..... 非常に短いですがこのあたりで終わっておこうと思います。ちなみに、僕はこの文章を第三者的な言葉遣いで書いてはいますが、苫小牧は近いですのでまた参加させてください。この文章の続きはその時にでもしましょう。

それでは。（網倉）

身近な緑が暮らしを快適にする

苫東地区森林愛護組合 forester 草 苺 健

《美しく、散歩したくなり、散歩すると元気が出て少し癒されなぐさめられ、たくさんの人を受け入れ、もちろん子供達を大歓迎で、産物で工夫して使えるものは生活に役立て、寿命に近いものはその直前で木材として利用し、繰り返し萌芽して出てきた若い木は薪炭やほだ木に回し、その代わり木々の都合も聞いて手助けも惜みず、からまるツルはリー

スに、削りやすい手頃な木は木工で遊び、クマやシカ、鳥たちや昆虫、花やバクテリアまでひとつながりで合わせもち、時折、マチに住む人たちが来たときにはありのままを見せ、くつろぐというのなら場所と簡単な作業を提供し、地域の人たちが「これはわたしたちの財産であり文化みたいなもんだね」としみじみ語り合う。》

わたしがイメージするいぶりや苦東の雑木林はこんな風であり、こんな方向でこれからもつきあってみたいと思うものです。

これは平成9年のいぶり雑木林懇話会の会報に、当時の気持ちを正直にしたためた一文です。この冊子をまとめるにあたって、一番最後に全体を見回しながら何か書き記そうとしたときに思い出したのがこれでした。ここに記した淡い願望こそ、いろいろな意味合いが込められて必要十分なものではないかと考えられるのです。

本来こうであればどんなにいいだろうな、という忘れかけたり、あきらめてしまっていたことを、できるだけ実現できるようにやってみること。そして得たものは周りの人たちに紹介していくこと。ここで行われてきた試みは、そんな流れの中のどこかに位置しています。

そしてその行き着く先は「たった一人でやれる森づくり」。森や林を見る目と手入れの技術を体得したら、おのこのフィールドを探し当て、たった一人でもやっていける林にするのです。各地からいろいろな報告が届くことを願ってこの稿を閉じることにします。

育林コンペ実況報告

平成11年11月23日(土)

午前10時半～

苫東の旧平木沼緑地

雑木林ケアセンター

開会と経緯の説明

草苺 育林コンペの品評会のようなものを始めたいと思います。皆さん、ようこそいらっしゃいました。ちょっと、育林とコンペの経緯のおさらいを数分間させていただきますが、まず、ここの苫東の緑地は国道235号から北に500haくらいのみとまりがあるのですが、平成4年に間伐をスタートさせました。だいたい、人工林の保育がようやく一段落する気配が見えてきた時期でもありました。

それから、一方では雑木林が大変魅力的な素晴らしい素材であるにもかかわらず、地域があまり注目していないということもございまして、胆振の雑木林を世に出そうというような下心も実はあったわけです。しかし実際に保育にこぎ着けるまでやや準備の期間がありました。それは、木を切るということはどうも悪いことだというような社会通念があり、それをくずすために行政の方と詰めなければいけないことと、所有者側の組織内部でもやはりシナリオが必要であり、それらに足かけ3年位かかってしまいました。ですが、平成4年にとりあえずスタートしたわけです。

それで雑木林の間伐に関わっていると、やっている本人、関わっている本人も癒される場所があったり、新しい発見があったものですから、これはどうも1人占めするのはもったいないと考え始めて、毎年10月に何十人が集って保育をやるようになりました。それを続けている間にどうもこれはテクニックや作業の約束事を決めれば、皆さんでコンペのようにやっていったら面白そうだと思い始め、今度は平成9年に育林コンペというものを立ち上げた次第です。

育林コンペを始めないかという時に、5グループが賛成してくれて入っていただき、本体の愛護組合を含めると6グループになりました。最初、育林コンペのコンペというのは、competitionコンペティションというような競争をイメージしていたのですが、どうも結果的にはコンペじゃなくて、比較する、comparisonコンパリスンという英語にちかいは

ないか、育林コンパというのが実体じゃないかと思うようになりました。ただ、育林コンパというと、バーベキューでもやって飲んで遊んでばかりいるような（一同笑い）悪いイメージがありますので、とりあえず今後もコンペで参ろうと思います。

森林を所有する側の考え方としては、「継続すること」「産業空間の中の快適なゾーンづくりを目指すこと」を柱にしました。つまり今ある森林状態をこわさないで付加価値を生み出すような手入れをするというのが大きな条件だったと言えます。その方法も実は事前に試験をやってみて、大体40年生なら1500本を下限にしておけば大丈夫だというガイドラインを得ました。また、細かい方から原則的に間伐をしよう、手入れを待っている林ばかりだからせめてこのゾーンの一部だけはこざっぱりした林づくりをしてみよう、ということでした。

コンペのスタートの際は、各チームのリーダーの方々に集ってもらい、このような密度の話、山火事防止のために限られた時期の限られた場所のたき火、などについて細かくうち合わせ、モデルゾーンでha1500本の選木をやってみてゆるい目標をある程度共有しました。それでスタートと相成りました。

参加者の紹介

草苺 それでは、各グループを紹介させていただきます。

まず、苫小牧レクリエーション協会の椿さん。それから、レディースネットワーク21の濱田さん。お子さんづれであります。札幌雑木林ファンクラブの孫田さんご一行。そして苫東地区森林愛護組合でわたしが代表しておきます。いぶり雑木林懇話会の本田さん。それから、北大チームの浪花さんご一行です。

それから、コメンテーターの方に一言ずつ挨拶いただきたいと思います。コメンテーターは、林とか林業のプロパーの方から道の林業指導事務所の泉所長、野生生物の観点から北大演習林の青井先生、人と林のメンタルな接点から精神科医の滝沢先生にお願いしました。

泉 苫小牧の方で胆振東部林業指導事務所に勤務しております泉でございます。今日は、草苺さんの方からご招待をうけまして、こちらの方に参加させていただきましたけれども、全く新しい取り組みといたしますか、私どもの通常の仕事以外のこういう新しい取り組みの中で、私にどういったことができるのか、半分不安をいただきながら参加させていただいております。

ただ、私どもも、どうも最近では林業というのは経済性原則だけではなかなかPRできないという状況になってきておまして、平成6年度でしたが、林業白書でも森林の文化性といえますか、森林文化的視点から森林を眺めないといけないのではないかとということで国の方もとりあげております。こういう視点から、皆さんも雑木林の会として、新しい森林文化といえますか、むしろもっと古いものかもしれませんね。日本はずっと昔から野遊びとかやっておりますので、古くて新しい森の文化に挑戦されているのかなということで、

私も今日は楽しみながら参加させていただきます。どうぞよろしくお願いします。

(一同拍手)

青井 青井でございます。今日はみなさんが取り組まれた保育の2年間の成果を拝見すると伺っています。どんな風に仕上がっているのかなという興味もでございます。その辺じっくりと見させていただきたいと思います。

(一同拍手)

滝沢 今日は草苺さんにご招待されて荷が重いんですけど、私は、森林の精神保健作用、要するに森林の中で人がどのように癒されていくかということに日頃から興味をいただいています。草苺さんに話を伺っている中で、こういう会に呼んでいただきました。あまり、みなさんを評価するというおこがましいことはできないと思いますが、一緒に楽しませてください。よろしくお願いします。

(一同拍手)

プレゼンテーションの方法

草苺 これで今日のコメントーターの紹介をおわります。ここで、昼食のための火をおこしながらここを後にして、現場にむかいます。車で大勢で行くと混みますので、トラックを用意しました。トラックの荷台にのれるだけ乗っていただいて、先生方は助手席の方へお乗り下さい。皆さん乗り切れないようでしたら、大きめの車で分乗して移動します。移動しましたら、苫小牧レクリエーション協会の方から順々に、そこで降りまして、「私もこういう森づくりをした」というプレゼンテーションあるいはいい訳みたいなものをとうとうと語っていただきたいと思います。(一同笑い)

項目をしては、5つございます。1つは、保育のねらいですね。こういう林にしたかったんだというところで一言。それから、実際にこんな作業をしたという話。それから、元の林と今の林ではどんな位変わったかというところを述べていただく。4番目に2年間の作業や林のつきあいに関する感想なんかを述べてもらって、次のステージにむけた抱負でしめくくる。

林の中に入ってもかまいませんし、入り口あたりで終わっても一向に構いません。それです、先程のコメントーターの方々が厳しくチェックしてコメントを書かれます。簡単にいうと、そういうことでございます。終わりましたら、次のブロックへ移動します。それで、北大チームのところまで行きましたら、北大チームはアトラクションのような何か仕掛けを用意していらっしゃるようなので、それを楽しませていただいて、それが終わりましたら、ここへもどってくる。

ここで、昼食の用意をしながらその時間にコメントーターからコメントをいただきます。それで本当は比較の方のコンパリスン、育林コンペの方はそれで終わりなんです、それではあまり格好がつかいせんので、特選を選ぶことにいたします。特選はコメントーターの方にちょっと今はやりの談合(笑)をしていただいて、全くいいかげんな選び方で特選を選んでいただく。で、何か商品をさしあげるようにしようと思っております。

今、こういうふうになっておりますが（マイクのこと）、事務局の私の希望といたしましては、今日の育林コンペのありさまを映像と文字で冊子を作りあげられたらなと思っております。ご意見を発言される場合はマイクを用意しますので、できるだけ手をあげていただきたいと思っております。いずれテープおこしの作業がでてまいります、そのときは北大の学生さんなどにもお願いする可能性が十分ございますので、手分けをしてご協力いただければと思っております。

というわけです。何かご質問ございますか。おしゃべりの時間は遅れ気味ですので、15分以内位でいきたいと思っております。では、よろしく申し上げます。

（苫小牧レクリエーション協会へ移動）

言い逃れOKの作業説明

草苺 一発目ですね。苫小牧レクリエーション協会です。それではどうぞ。

椿 それでは、おはようございます。苫小牧レクリエーション協会の椿と申します。草苺さんとのお付き合いは、教育委員会にいたころに、苫東のつたもり山林で子供達のキャンプを始めたのがご縁で、今日までいたっております。私どもの団体のこの育林コンペにあたってのコンセプトは森を遊ぶというタイトルで考えました。

そして、先程、草苺さんの方から言い訳でもなんでもしてくれという話でしたからほとんど言い訳がましくなるんですが、わたしどもの協会の活動は、主に子供達の夏のキャンプの援助をしております。毎年、夏の一番天気の良い時期にほとんど週末出かけるものですから、ちょうど育林コンペに木を切るのに調度いい涼しい時期に息切れをしましてですね。今年3年目で11月のご案内がありました時点でそれまでになんとか格好をつけようと、前回9月10日くらいにこちらに来まして、人数があまりいなかったもんですからとりあえず切るだけ切って次回片付けようということ、それが今日になってしまいました。

私どもの基本的な考えは、協会自体が遊びを主にやっていますから、どうやってこの雑木林と遊べるかということに思いをめぐらせました。たとえば、春は山菜取り、夏は子供を連れて虫取りに来る。秋は、山菜ですとかコクワですとか食べる物を取ったり、冬は動物の足跡を見てもよいなどと計画はたてましたけれども、実際に木を切る以外でやったのは、去年の夏、いや秋くらいにツル切りをしました。私どもは毎年12月にしめ飾りを自分で作るという講習をやっているんですけども、その一環の中で、ツルを切りまして、クリスマスのリース作りを取りいれたのが、遊びということではやったことです。

まだ、ここの紅葉を見たことがないんですね。毎年紅葉を見に来ようといいながら、9月の末に樽前サンフェスティバルというのがありまして、そちらの方に全精力を使い果たしまして、プレーキダウンするという形で、今年も実は見ておりません。葉っぱのついてる時期に今年も来て切っているものですから、改めて見るとまだまだ切る木がいっぱい

あるんだなという気がいたします。

道具は基本的にケアハウスにある手打ちのノコをかりまして、1回10人位で少しずつ切る作業と、あとチェーンソーをもってきまして少し大き目の木はチェーンソーで切るという作業をしました。

作業の感想ですが、非常になんというか純粋な気持ちになれるというか、ここに来て、木を切ると他のことは一切忘れてしまうというか。手でやるとこれぐらいの木が結構時間がかかって、やってもやってもダイエットには効果がないんですけども、夕方には疲れてぐっすり眠れるという効果がありました。

あと、私事なんですけど、何年か前に家族を連れて来まして、冬囲いの木を少し選んで切らせていただいたことがあります。そしたら、後ろにテープが結んであると思うんですが、ちょうど一番最初に各団体のみなさんとこういう木は残そうとしばったテープだったと思うんですが、親と一緒に切っていましたら、親は真っ先に切ってるんですね。むこうの目的としては冬囲いをするための木を切っているわけですから、全体の森林をどう残そうか残すまいかを考えずに切ってしまったわけで、やっぱり人間はそういう欲望にかられるとまっすぐ太い木を選ぶんだなあというのが実感です。

それから、抱負ですね。来年こそは、なんとか紅葉を見るために夏の忙しいのを分散しまして紅葉を見たいと思っています。以上です。

(一同拍手)

草苺 ありがとうございます。サラリーマンの忙しさの最中、いろいろな障壁があります。そんなこんなでなかなか作業が進まないの私たちの常ですね。目標の密度を1500本程度としますとまだまだ切り残している状態だといえると思います。それでは、次のところに移ります。

(レディースネットワーク21のおこもり広場へ移動)

草苺 ではレディースネットワーク21です。お願いします。

濱田 この案内人をしております濱田です。ここは今、レディースネットワーク21というふうで紹介してもらったんですけど、私が関わっている林業関係の都道府県職員の女性達でつくっている豊かな森づくりのためのレディースネットワーク21という団体がありまして、北海道にも会員が何人もいますので、草苺さんから最初お話が来た時にそういう女性達のメンバーでいかがですかということで、それも面白いだろうなと思ってフィールドを預かることになりました。私としてはそのメンバーに固定せずに、できれば、(ご存じない方もいると思いますが私は林業技術指導員という仕事をしておりまして、林業の詐欺師なんですけど(笑) 仕事では森に関わっているんですが、)それとは別に非常に森が好きでそういう仕事をするようになったので、プライベートでもっと密接に関わる関係を作りたいということと、それから普段仕事でいろんな森に行き勝手なことを言ったりし

ているんですけども、実は技術的にはかなり自信のないところもありまして、かなり人工林の施業が中心になるのでこういった里山とか若い広葉樹林をどうするというのは全然わからないというのが実態なんです。

たぶん林業関係の泉所長のような大ベテランは別として、圧倒的に多くの林業の職場にいる道の私の仲間なんかは事務的な仕事が多いですし、現場のことはよくわからない。だからそういう人達にとってはもっと仕事と離れて森林と接する機会をつくって、技術的にも自分自身の勉強になるような場にできたらということが1つです。

それからもう1つは、今日も2人の子供をつれてきていますが、普段は母親なので、お母さんと子供達にたくさん森に来て遊んでもらいたいという目的と2本立てで手入れをしてこようと思っていました。それでですね、昨日の夜、この子に邪魔されながらどうにかこうにか写真の整理をしましたので、これを開きながらこの3年間の経過をお話させていただきます。

まず、ここの代表が私で、最初にレディースネットワーク21とか林業関係の道とか国の知っている人を通じて、林業関係の女性達を中心に参加を呼びかけましたら、10人ほど集まりました。それで、記念の写真をログハウスの前で撮りました。

林の状態はどうだったかといいますと、先程のエリアと同じなんですけど、見ていただくとそちらのようなものですが（向かいの林をさして）、小径木がかなり多くって密度が高くて、柴を掻き分けながら歩かなくちゃならない、それと枯れた木や腐っている木が非常に多い林でした。そこでまず、目標としてはとにかく切ろうと、整理をしようと、枯れてるのとか腐ってるのとか細いのですね、樹種でいえばサワシバとかアズキナシというようなあまり面白味のない木が多かったんで、そういうのをどんどん切ろうということで、まずはひたすら手ノコで切ろうということになりました。

それで、私の呼びかけに応じて、最初の年は2回か3回位やっただけなんですけど、ほとんどイベントのような形で、北海道の中で林業だけじゃなくて、農林水産土木建築の女性達の詐欺師集団でつくっている（笑）団体の方にも呼びかけて、それから私の苦小牧の友人達の親子にも来ていただいて、とにかく入れ替わり立ち替わり、親子とか女の人達が来て、ノコギリでひたすら木を切るという作業をしました。

ほとんどそれは、お昼くらいまでちょこっとやるだけで、毎回こうやって子供達には冠を作ったして遊ばせるとか、お母さん達には蔓がいっぱいある所でリースの材料採りをしたり、それからこんなたき火をして竹でバームクーヘンづくりにチャレンジしたりとかほとんど遊びで半日すごしていました。いろんな人が入れ替わりで来るので、当の私は1年目はほとんど作業ができなくて、今度はあの人 came、今度はあの人 cameとかいってホステス役ばかりやっていて、全然仕事ができなくて焦りのままに1年が終わりました。

それで2年目はちょっとまじめに作業をするぞということで一層呼びかけました。今度はイベント形式ではなくて口コミでどんどん来てもらうという形になりまして、2年目の春にはこの子が生まれました。秋にはこの子をおんぶして、ひたすら山仕事。去年の10

月下旬から12月初めまで、ひたすら毎週のようにここに通っていました。一回の人数は10人位とそんなに多くはなかったんですけど、親子づれとか道の林業関係の仲間とかに入れ替わり来てもらって、またひたすらひたすら木を切りました。こうやってたき火をするのが楽しかったんですけど、たき火でお昼ごはんを食べた後もしっかり作業するというのでやってました。(子供が大声で泣き、一同笑う)

私、産後5ヵ月からこの子をおんぶしてこんなことをやっていたので、実は年末から体調をこわしてしまい、なかなかその後が出来なくなって、3月は2回くらい定期的に来ていた人達にお願いして、人を集めてもらってチェーンソーを入れて少し大きいのを切るといいう作業もちょっとやりました。けど残念ながら、その時の写真がないんですね。

それで去年は終わりました、一応去年で大体いいところ切っただろうなということで、今年はずいぶん、今年の3月までは苦小牧にいたんですけど、春に私、当別の方に転勤になってしまったんですね。それで遠くなってなかなか来られなくなったもんですから、やっぱりこう頻繁に通うのは無理だということで、次ですね、3年目。3年目はですね、10月16日に一応コンペの前に最後の仕上げをしようということで何人かの人に来てもらいまして、鎌研ぎの講習なんかをして、あちらの林縁の方の草刈りをしました。それから最後の選木をして、最後のチェーンソーを入れてもらって、後はノコで来るということをやりました。こんな感じですね。

それで、あんなにこんでいた林が今見るとかなり、(これでも多いかもしれないんですけど)かなりすっきりしたなど、木を掻き分けなくても歩いていける位になったので、一応これで一段落して様子を見たいなと思っています。それから、2年目の春に、もうあのときは私は出産予定日の10日前だったんですけど、ほだ木に駒うちをして、置くところがないといってこの山に置いていったほだ木から、この10月11日にナメコが出てたりして、それからあちらのケアセンターの横にあるピザ釜でみんなでピザをつくって食べたりとかしました。この子は二年目の五月に生まれて、今は一歳半になります。実はこの山は子宝山ですね、今までこの山に関わってくれた人で、この子を始め4人生まれてるんですね。(一同笑い)来月ももう1人生まれるんです。(また笑い) といったようなところで、おこもり広場とつけたんですけど、女子供が森づくりをする広場になればいいなということやってきました。

抱負は、遠くなったんで頻繁には来れないんですけど、ここの山には非常に思い入れがあるので見届けていきたいと思っています。それで、かなり切った柴なんかも多いのでたき火を兼ねて整理して、たき火クッキングを楽しみながら年に何回か通えたらいいなと思っています。以上です。

(一同拍手)

草苴 ありがとうございます。何か質問ございますか。なければ次の所へ移ります。

(雑木林ファンクラブへ移動)

草薙 では次に札幌雑木林ファンクラブをお願いします。

孫田 札幌雑木林ファンクラブの孫田です。札幌から来てる都合上なかなか腰が重くて、実質何回やったかと実は数えられる位しかここは手入れをやっていません。当初は毎月1回来ようねという話をしていたんですが、なんやかんや別の行事とぶつかってこれないということで、実は最後10月には今日のコンペ用に仕上げをしようかと言ってたんですけど、それもやらず仕舞いで、今日の日をむかえました。

実はどういう林にしていこうかという目標を明確にもっていただけではありません。何となく本数が多いから切っていこうということでやってました。実際、向かいの林とこっちの林を比べてもらおうとわかるように、相当立木密度も変わっています。これ位切ったようですが、ほとんど生きている木を切っていません。結果的に切っみたらみんな枯れていたという具合です。

大多数がコナラが多いんですけれども、夏場に切らないでほとんど冬場に切ったもんですから、コナラはぱっと見た感じ生きているかどうかわからなく、冬芽まで見ないとわからないんですが、切っている木を見上げていたら枯れている木ばかりだったという感じで、本当に間伐になったかといえば実はよくわかりません。見た目の上では間伐になったということです。

私達のねらいとしては、皆さんチェーンソーを使ってきれいにやられるようなので、一切使うのはやめようと、最後まで手ノコでやっちゃおうということでやりました。中にはチェーンソーを使って豪快にきれいにしたいという人もあって、内部で話し合いをもったんですが、何回かチェーンソーを使わずにやったんで、この際だからよそと比べて多少きたなくてもいいから、人力だけでやろうという自己満足を得ようじゃないかということで進めました。

やってる最中、草薙さんにも記録写真を撮っておくようにと言われてたんですが、結局刃物を持ってここに来ますと切る方に熱中しまして、途中の写真が1枚か2枚しかないという状況で、さっきの濱田さんのようなアルバムはとても作れない、たぶん1枚引き伸ばした写真でこんなんでしたよと言って終わっちゃうかなという気がしています。

あとはですね、今回やってみまして、刃物と木という人間にとっては本能的な道具ですね、その2つを扱わせるとどんなおじさんでも、おばさんもいましたね(笑) 喜々として動くもんだなと、ということですね。それから特に用意したわけじゃないですが、冬に作業をしてたき火をして、そこでせいぜい焼き芋をするか餅を焼くか位しかしていませんが、それでも非常にほのぼのとした雰囲気といえますか、一汗かいて物を焼いて食べて、非常にリラックスした雰囲気を味わうことができました。

それともう1つは、私達のグループでは、今道路脇に木を積んであるのはわざと積んだんです。ここだけで切った木を消費しないということで、馬場さんという方が今日も札幌から来られているんですが、馬場さんのうちで薪にして下さるということだったもんですから、夏に1回運び出しました。確か2トントラックで来たんですが、全然積み切れなく

てその残骸がここに今積んであるわけです。これでも減ったんです。

またこれから、この場所をまた借りることができるということになったもんですから、お子さんをつれて来られた方でも、子供さんが非常に喜々をしてこの中を遊び回っていると、今回は来れないけれどもぜひまたやりたいという連絡をいただいております。またあの刃物を持って、この山の中を駆け回り回れたらなと思っています。なかなか言い訳の方が多いものですから、「とうとうと」はならず「とつとつと」でしたが、以上です。

(一同拍手)

草薙 ありがとうございます。ええと、ここの紅葉ですが、こんな感じ(写真)でした。ちなみに、先程のおこもり広場はきっと当時で一番よかったと思いますが、これです。

(一同 きれーっ！！「いっすねー、おこもり」などと声あがる)

*ここで雑談

本田 草薙さん、これエノキダケ。

草薙 ほんとだ。(参加者に)これから寒い時期、切り株などでエノキダケが結構楽しめます。今このエノキダケでできました。

本田 立っている枯れ木にも、こういう放置しているところにも、これからですね。雪の下ともいいます。

草薙 柄が黒いのが1つの特徴です。植えたやつもいこれからだと思います。ナメコより美味しいんじゃないですか。

本田 そうですね。

草薙 雑木林を間伐した後はかなりエノキダケが出てきますので、ポストナラタケ、こちらの方が本当は楽しめる。喜ばれるし。誰か持って行って下さい(笑)。

(森林愛護組合へ移動)

草薙 では(自分で)森林愛護組合(の紹介)です。元々この部分は、苫東愛護組合が一番最初にコーディネートして進んできたわけですがけれども、私の立場もこの愛護組合の担当スタッフだったのから、会社のリストラがあって、フォレスターという名称を自分で作って自分で決裁書を仕立て、やめる時にフォレスターとして自分を任命しておいて会社をでていったという格好です。会社をでて行ってからも、当面フォレスターとして色々な物や場を使えるようにしてきたというわけで、思い出の場所であります。

といいますのも、この育林コンペをスタートさせた時は、実はまだ私はここの緑地管理をするスタッフでありまして、最初の年の育林コンペの作業というのは、リストラの話を片側で聞きながら、それで仕事の方も予算がつかなくなりつつある時期で、だんだん仕事も業務も少なくなって、そういうやるせなさを、現場で、後半は平日も週2回位は林に来て作業をするということに決めて、ログハウスの周りやこちらの方へ来ていたわけです。

ですから、今日の参加者で本格的に平日作業したというのは本田さんと、回数ははるかにずーっと少なくなると思いますが、私ということになると思います。ここでやりたかった森づくりというのは、先程も話しましたが、森づくりそのものは奥の深い大変なものなんです、難しいから私にはできないと思っている人にはぜひ、あなたにもできる、逆に難しくない、というメッセージを出していきたくったところです。

雑木林の保育は基本的にですね、コナラの復元力におまかせすれば決して壊れない。だから心配しないで、間違ってもいいから切っていいよというコンセプトを立ててきたわけです。ここは私のフィールドでもございましたので、試行錯誤をしながらなんとかずっと広葉樹の間伐をしてきているわけですが、先程ちょっとご紹介しましたように、本数を40年前後で1500本というのを第一目標にしたら絶対大丈夫だという感じになってきたわけですが、その時の1500本を今日お見えになっている泉所長の前の前の所長さんにご相談しました。

それで、皆さん密度曲線というのをご存じの方もいると思いますが、その密度曲線に粗い仕立て方、非常に密な仕立て方、それからその中間の仕立て方というのがあるわけなんですけど、非常に密な仕立て方でこの本数チェックをしてもらっても、全く間伐の効果がないという読み方になります。本当にあの曲線をご覧になるとわかるんですが、思い切り切って成長がぐんとよくなって、また切ってというのが広葉樹の育て方でそれで間伐の効果も現れてくるのだと思うんですが、それが私どもがやっていたやり方でいくと、とてもこんなもんで切り足りないやということが、この密度曲線から出てきてしまいました。

ですから、それが今の1500本なんです。実際の生い立ちが直径6cm以上の樹木が2500本位あるわけですから、1500本におとすということは、最初のうちはおっかなくておそろおそろ切れなようなものです。どんなにがんばって切ってもおそらく1800本とか1900本位でおさまると思うんです。それで知っている人、本田さんや演習林の及川さんに見ていただくと、最初の頃は馬鹿にされるくらいのもんだと思うんです。そういうようなものを何回か繰り返して行って1500本以下に、例えば1200本までおとしたことがあるんですが、そうすると切っているうちに不安になります。現場の担当が私の所に「ちょっと切り過ぎたようなんだけど、どうだろうか」という相談に来るのが大体1200本位だったと思います。一般の方からも、ちょっと見た時に切りすぎじゃないかというわさが、ちらっちらっ出てくるということがございました。しかし本当のところは、その程度の強い間伐をしないと間伐の効果はでないというのが真実ではないかと思えます。

それでまあ、きれいな林を作って、色々な市民の方にも苦東だけじゃなくて胆振の雑木林というものを売り出そうと、あるいは道新の方も来られていらっしゃいましたが、メディアを通じてでも出していこう、それで、もう1つの私のリンクはそういう雑木林をふんだんに持っている苦東の土地は高く売れるというところまでシナリオを書いて見せて、役員なり社長なりにプレゼンをしていくと、こういう風につなげていく。

やはり、お金（経済）のところにくっつけるということも大変大事だったというのがあります。それでこの間伐をやる時にもやはり、本田さんにも色々ご協力を頂いて、厚真町の農家の方に切った材をひきとっていただくというのが、最初のシナリオでした。そのうち、ゴルフ場の広葉樹間伐が出てきてしまって、材が買い取れなくなって余ってきた。買い取らないとか買い叩きということになってしまって、今は炭材に出しておりますけれど、そういうふうにして、木を切ってもうけてくれる人、木を切ってもらってきれいな林で得をする人、得をする人が3人ちゃんとならんでいくと、仕事は結構動くという、そのところまでいく必要があったし実現できてよかったなと今では思っています。

それから、私共の所の愛護組合の特徴としましては、今日も富永さんが来られていますけれども、苫小牧の市民参加の方は愛護組合で受けることにしました。作業ももちろん手伝っていただきましたけれども、皆さんファミリーで関わってこられましたので、富永さん、佐藤さん、井家さん御家族、その他の家族の方には、家族みんなでフルシーズン楽しめるものはないかということで、色々メニューを出していただいて、着々とこなしていただきました。

例えば、ピザ釜を作るということも本州のまねをしながら、割と簡単に作ってとても上手に焼けるようになったり、竹を入手してバームクーヘンを焼いたり、それから選んだわけじゃないんですが、私共のフィールドの丁度裏側の平木沼、今湖面が見えてますが、そこでカヌーをしたり。かっこよくいえば雑木林のある暮らし、それから林のガーデニングみたいなそういうような捉え方をしながら、結構楽しく遊んできたというのも裏面であります。いや表面ですね、どちらかということ。

それで、元の林と今の林では、他の方を同じように右側と左側で違うんですけども、できるだけ1500本以上切るように心がけてきたんですが、まだまだそういうわけにはいきませんでした。それで本数で調べていくのは面倒ですので、ある時気付きましたのは、切ってほしい木というのは枝先が止まっているということ。こうやって見ると止まっているのがわかるようになってきます。

例えば、コナラですと、非常に元気のいいものですとびょんびょんでいますが、中に入ってみますとふれあったために寸詰まりになっていて、来年はもう伸びないだろう、もう伸びるのをやめたいという意思表示が見えるような木がたまに出てきます。こうやって見ていると、これはおとした方がいいというのがわかるようになってきました。これを実際に伐採してみますと、半分以上が中が枯れています。腐れが始まっています。やはりその時期ちょっと遅い位かもしれないですが、みすみすただ腐らすよりももうちょっと早く手入れをしていたら、こういうことにはならなかったという反省になるんだろうと思います。

それから、私のようにどちらかといえば空理空論をやるような人間でも、何年かやるうちに自然にそうわかってきたと、まあだから誰でもできるという乱暴な結論を出していません。

それから、作業のつきあいは、先ほど滝沢先生からちょっとお話がありました、リス

トラの最中から癒されながら作業をしてきたし、札幌に勤めるようになりまして、デスクワークの疲れを肉体労働で癒すということの後半の一年はやっておりましたので、また一段と新しいつきあい方になったという気がしています。

次のステージに向けた抱負ですが、ここのステージもさることながら、今、地権者の方と詰めておりましたが、なかなか瀬すれば鈍すで、雑木林の魅力とかそういったものに対しては、非常に閉ざされた発想に逆戻りしています。それをどういうふうにしていくか。メディアの方に取り上げていただいて、逆のスポットライトをあててもらってここをもう一回浮かび上がらせるか、そういう方法でもない今の経営に関わっておられる方が自分の持ち分のこういう山に対して、正しい認識をもていただけるかどうかあやふやなところがございまして、私の抱負としましては林の抱負ももちろんそうなんです、そちらの方も仕掛けをもう一度やる必要があるな、でも重たいなと思ってやっているところです。

とりあえず、申請書はもう出してありますので、ここ1年ずつ更新していけたらいいかなと思っているところです。やめても結構ですし、できれば、どんどん続けて行きたいという気持ちであります。ちょっと長くなりましたが、以上です。

(一同拍手)

(胆振雑木林懇話会へ移動)

草苺 いぶり雑木林懇話会をお願いします。

本田 今日、私ここに来るのは気が重かったんですけどね、しばらくぶりに足を運びました。いぶり雑木林懇話会は3年位前でしたかね、これも事務局の草苺さんが色々あったんで活動も怠慢していますが、草苺さん、濱田さん、青井先生、浪速君達と、先ほど草苺さんが話されたように、身近にある雑木林の持つ色々な意味での懐の深い文化性とか、もう少し環境問題も諸々含めて、それと付き合うことの意義だとか楽しさをもう少し一般的に、自分達だけが楽しむには勿体ない世界だから、なんかやらないかということで、いぶり雑木林懇話会というのを3、4年前に始めました。

ここは草苺さんのフィールドで、私は私で自分のところでずっとやってきたんですが、山ってというのは非常に公共性があるもんですから、この山も苦東が管理している山なんですけれども、草苺さんから話があったときは非常に楽しみで、これ位の山から手入れをするのが一番面白いんですね。私も長く雑木林に手をかけてきたんですけど、これのあの何でも物事はいっぺんには見えてこない、あるところまでやって手をかけてきりが見えてくるというんですか。特に木の性質とか、森の移ろいというのは非常に期間が長いですから、日常的な時間の感覚から言ったら先が見えてこないんですが、一度こう山とこう関わってやっぱり手を動かさないとだめですね。切らないとね。切って木がどういうふうになるか。手入れして周りの雰囲気が変わるのに3年間かかるんですね。そこでみえて、その先が初めて見えるというのか。こういう雑木林、里山との付き合いというのは非常に奥が深いし、面白い世界だと思っています。

そこで、私は最初のとっかかりに初歩的な手入れといいますか、枯れた木とか傾いた木を切り出す、それから見上げてこれもこれはだめな木とかいうのを切ったんですが、基本的には樹種を多様にするというふうにしました。私の山の手入れは2つ原則があって、1つは樹種を多様にすること。できるだけ色々な木があるように、その辺りの林の中で珍しい木があったら、どんなに小さい木でも残すことを心がけています。それから、その持続性を考慮するといいますか、それは、ここを手入れした時に、私らは一番先に切った木は、まだそこは残っていますが、草苺さんの許可を得て、奥は基本的に切った柴は全部焼きました。

これはどういうことかという、新しく更新するのに、何気ない笹藪ですけど、かなり再生力があるんですね。その条件を整えるためには柴は始末した方がいい。

なかなか難しいものがあるんですけどもう1つ、その多様性と持続性ということで、私は農家をやっているから特にそれを感じるんですけども、暮らしとの結び付きを取り戻すというんですかね、切った木を色々な意味で生かす。そういうことがより里山に、雑木林に親近感だとか、何かそういうものをもたしてくるように思います。春の山菜採りから、夏のバードウォッチング、紅葉だとかきのこだとか色々楽しめることがある。

私は薪ストーブを焚いていますが、そういうこととは別にキノコを沢山つくっているんですね。山の木は非常に色々な種類がありますので、私はシイタケ、ナメコ、クリタケ、ヒラタケ、それから今はもうしていませんが、エノキダケも一時期栽培していました。あと自分では菌は打てませんが、マイタケの植菌したものを、こういう所に植えておくともごとなのをとれるんですね。

ただそれも一般的なビジネスとしてやるんじゃないで、今日私12時になったら席をたたせてもらうんですが、うちの裏山で今日20人グループが来てやってるんですね、色々なことを。今日はクリとクルミを移植したり、農作業もしてますけど、というのは、うちの近くに最近リスが顔を出すようになって、リスが来たから木を植えてやるからということで、早速苗木を林から引っぱり出して、厚真の兼広(?)君と植えてきたんですけど。その中で朝私はね、今日来た人達はカレーライスを作りましたが、食材にイモと人参そろえましたけど、歩いたらヒラタケだとかナメコだとか沢山まだあるんですね。そういうものを置いてきてここに顔出させていただいているんですけども、ある意味で暮らしと結び付くということは農村でもほとんどとだえちゃってるんですね。やっぱり手を動かさない山はやっぱりよくなりませんし、手を動かすことは日常生活といかにつながるか、町で暮らす人達がそれを取り戻すにはなかなか難しい事だと思います。農村でももう切れてるんですからね。

だからこの楽しむ文化というものをどこで取り戻していけばいいかを、非常に、こういう時代の大きな変わり目なんですけど、とにかく懐は深いし、楽しい世界ですので、今日はこうやって草苺さんのリーダーシップでこれほどの人が集まってくれて非常にわたくしも嬉しく思ってます。草苺さんがいうように山は色々なところにいろいろあるんですね。

ただ所有関係とか色々な権利関係があるんです。手がかけられない現実にはさまざまありますが、相対的にいえば身近にある自然と色々な人の生活がどうやって重なっていったところから子供の教育だとか、いろんな事を与えてくれるものがあると思うんですよね。そういう事をこれからも、皆さんといろんなときにいろんな思いを語り合いながら、これからもつきあっていきたいと思います。おわります。

(一同拍手)

草苺 御質問は省略しまして、次のグループへと移ります(笑い)。

(北大演習林チームへ移動)

草苺 では北大チーム、お願いします。

菅原 それでは皆さん集まったでしょうか。北大チームの総合司会です。いろいろあるんでちょっと時間とらせてもらいます。それでは最初に浪花さんのほうから北大チームの生い立ちというか成り立ちについて話してもらいたいとおもいます。

浪花 皆様どうぞ火の側で。ちょっとけむいですけど、それではこちら側に。

(一同移動し集まっている)

北大チームは北大森林科学科と演習林の職員で中心的にやっています。チームの成り立ちなんですけども私達がこの育林コンペに関わるときに最初に考えたのは、僕もまだ北大の森林科学科をでてそのとき働き出して2年でしたので、まだまだ山のことはわからないんですけども、自分達が学んできたことを山づくりの中で試してみる場が欲しかった。今までの林業とか森づくりとは違った形での新しい森づくりを試したいというのが一つです。

我々が専門教育の中ではなかなか身につけられなかったような、専門的な知識を森をつくるための、例えば樹種の見分け方だとか、伐る樹の選び方だとかノコやナタの使いかた、そういう実践的な知識を学ぶ場、学びの場としてこの場所をつくりたいと考えました。

三つめは、樹を切って頑張って働くだけじゃなくて、森の中で楽しく遊んでリラックスできる憩いの場をつくりたい、試す、試みの場、学びの場、遊びの場としての森をつくることを考えました。これが北大チームの基本方針です。

引き続いて、森づくり、どういう森の手入れをしてきたかをお話したいと思います。まず私達、森の手入れをする前に、このエリアをひとまわり回りまして森の姿の発達の違いから、手前から、えーとこれがその角っこです(図で示しながら)。縦長に約100メートル横が50メートルの細長いエリアなんですけれども、手前から約30メートルずつで、それぞれ特徴のエリアに分かれました。

まず、一番手前の、今我々がいるA地区なんですけども、森林の特徴としましては、昔伐った後に生えてきた株立ちですね、それが多くて5~6本、多い所では10本以上もあるところ、それぞれが非常に細くて、しかも曲がったり病気になるたりしている木がすごく多かったんです。前の林相は道の向こう側をみていただければわかると思います。それとつる植物が葉っぱの相に絡んでしまっていて、非常に樹冠が低く抑えられていました。そ

れがA地区です。

B地区の特徴は、おこもりの森の手入れ前の姿を想像していただければいいんですけど、非常の細い木が高い密度で生えてるのがB地区です。C地区は比較的B地区の間伐が進んだような形で、直径が20cmをこえるような木が割りと多くてその下に広葉樹の相が発達しているエリアです。

こういった我々のプロットに手を入れるときに、森づくりの方針というものを決めました。それではこちらをご覧ください。我々の管理のキーワードは、生物の多様性を維持するということです。それで、間伐をする木の選び方として三つのルールを決めました。

まず一番なんですけれども、他のチームやあるいは伝統的な雑木林の管理の中では、わりと一番うへの葉っぱの相にコナラとかミズナラといった寿命の長い樹を残して、それから下の樹種は全部伐ってしまう、という比較的樹冠が一つしかない単相の林をつくるやり方が多いんですね。私達はそれはちょっと止めようと、いろんな樹種を残して、いろんな生物が暮らしていくためには、一番高い相の下に紅葉などの中くらいの背の高さの相があって、さらに灌木の相がある、上中下という三つの葉っぱの相ができるようにつくりたいと考えました。

そのために間伐を行うときには一番上の相で、光がはいらぬように邪魔している木だけを伐りまして、まず一番上の相が、大きく枝を張れるようにします。同時に真中の相や下の相に十分光があたって、森林の高さ別の多様性というのが増えるような手入れをしました。それが一番目です。

二番目なんですけれども、先ほど本田さんがいわれましたけれども、我々もともと少ない樹種は伐らずにできるだけたくさんの樹種が残るように考えました。そのために私達は手入れの、やりながら、あるいは手入れの前もそうなんですけれども、この中を歩き回りまして、どんな木がはえているのか一応全部調べました。私達が分かっているだけでも、大体、45～46種この中に生えています。その中には、灌木が6種類、ツル植物が7種類くらい入っています。そういったある特定の木が無くなったり、ある特定の木だけが、増えたりしないように、満遍なくいろんな樹種を増やすような伐り方をしました。

三番目なんですけれども、野生生物に配慮するという意味で、鳥や動物の餌になるような実をつけるような樹種はなるべく残すようにしました。桜などは花も綺麗ですし当然残すんですけれども、その他に灌木類だとか、ツル植物だとかも気をつけて残すようにしました。特につる植物は、樹にとっては悪い害を与えるものが多いんですけども、もうこの木は駄目だなとわかった樹に対しては、ツル植物用の柵として残すような形でツルにも配慮した、森づくりをしてみました。

4番目なんですけれども、これは参加者の関わり方の心構えなんですけれども、参加者一人一人が、ただ木を伐るだけじゃなくて、いろんな、樹種の見分け方だとか、ノコの使い方だとか、あるいは、木の選び方だとか、そういった森づくりの実践的な知識をちゃんと身につけていこうと、そういうことを考えながら森づくりに取り組みました。

さっきのABCの説明にもどってきますけれどもABCそれぞれの施業方針を次のように決めました。Aの地域というのは、非常にもう曲がった木が多いので、そういった将来太くならない木は思い切っていて強度に伐ってしまいました。もともとツル植物が多くて、背が低くてあんまり上下の多様性がない林だったので、思い切って空間をあけることで、その下から生えてくる切り株から生えてくる新しい芽ですね、これを萌芽といいます、歩き回ればすぐに見つかりますと思います、広く空間をあけたことで、ここに育つ空間ができたんですね。こういった、新しい芽を育てることで、もともとあった木と新しい芽の二段林にするような形に誘導しました。

B地域なんですけども、非常に高密度に生えているので、先ほどもいいましたけれど、上層間伐という、一番背の高い将来大径木になる、大きな木になるタイプだけを残して光が当たるようにしました。Cの割と太い地域は、今回は手を入れずに残しています。AとBでは、間伐をした結果、林内が明るくなって笹が増えてしまいました。で、このままおいておくと、臨床の植物は笹ばかりになってしまって、草とか、草花の類いが生えられなくなってしまいますので、笹を刈って臨床植物の多様性も配慮した手入れをしました。来期以降の手入れなんですけども、Aはだいたい手入れが一通り済みしました。Bと、今まで手をつけなかったCの地域の間伐を中心に行っていきます。当然笹は増えてきますので、春と秋の2回、笹刈りをして臨床植物、いろんな笹に負けてしまいそうな植物が増えるような森づくりをしていこうと思っています。以上がこのチームの森づくりの方針です。

菅原 ここは林班Aにしているんですけれども、ここの萌芽の更新の説明をしてもらいたいと思います。じゃあ、サッチャンかクリケンから。

栗田 じゃあオレやります。この辺りの特徴は、一株当たりの本数が大変多い、あとそうですね、ここら辺にもツルが巻き付いてると思うんですけれども、もともとツルがすごくあって、形質の悪い木もありました。曲がったり、病気の木が多く、樹高成長が悪いものが見られました。

そこでどうやったかという、まず株立ちの木を1～3本に整理しました。また病気の木、曲がりのひどい木を中心に強度の間伐を行いました。また、ツルを切りました。この結果、先程も言ったと思うんですが、明るくなったので切り株から、そこもそうですけど、再生萌芽が大量に生えてきています。で、将来的にはこの新しい芽の中から成長の良いものだけを1～3本選んで育てる、という手入れを行う予定です。

菅原 はい、良くできました(一同笑い)。じゃあ続いて巻き枯らしの更新について聞きたいと思います。はい、それではえーと、巻き枯らしをやっています。巻き枯らしについて軽く説明をお願いします、川嶋さんからどうぞ。

川嶋 はい。演習林チームでは、手鋸と、あと大きい太い木についてはチェーンソーを使って伐採したんですけれども、そういうふうに太い木をチェーンソーとか手鋸で伐ってしまうと、意外と上がパカッと空いてしまうんですよ。それで、あちらの方は見て分かると思うんですけれども、結構伐りすぎてしまったような感じがあって、一気に林内が変化して

しまって、笹が増えたりとか、急激な森林の変化が起こるので、それに対応するというか、いろんな施業を試してみようということで、こういう巻き枯らしてという方法もやってみました。

こうやって樹木っていうのは、この外側の部分だけが生きているのでここを一周剥いてしまうと、いずれ死んでしまうんですけども、伐ろうと思った木に対してこうやって一周皮を剥いてしまっ、立ったまま枯らしてしまおうということで、急激に森林を変化させずに、急激な変化をしないで、この木をなくすというか、そんな法で、この木は立ったまま枯れるので、薪に使おうと思ったときにここから採っていけばいいっていうか、そういうふうな薪の貯蓄としても使えるということで、こういう方法でも施業を試みました。そういう例です。

菅原 はい、ありがとうございました。それでですね、今北大チームの人がプレートを持っているんですけども、僕らが施業したとか、残そうと思った樹種、メインの樹種にプレートを付けようと思っています。できたら今日みなさんに、たくさんいるのでお手伝いしてもらおうと思うんですけども、付けるのはピンテ、つまりピンク色のテープがついている樹で、北大チームの人に聞けばだいたいこれは何なのか分かりますから。わかんない人もいますけど、この手ぬぐいが目印なんで。(一同笑い)

じゃあ、プレートみんなに一人一枚渡してもらえますか、北大のチームの人。それでプレートは、今日ひもを持ってくるのを忘れてしまったので、根もとに置いて下さい。

(一同ざわざわ)

以下、臨場感を醸し出すため、本題からはずれませんが林内の会話を採録

菅原 それでは移動します。(一同移動) どんどん行ってください。

浪花 ナメコが出てるね。

川嶋 あ、出てるね。

菅原 ナメコとヒラタケが出てますね。ゾウの耳みたいなやつがヒラタケです。

(一同ざわざわ)

菅原 ヌルヌルしてるのがナメタケです。ここはうちのキノコのところで、それを、じゅんじゅん？

道広 はいはい。

菅原 道広さんの方から説明してもらいます。

道広 はい。ここにキノコを植えました。植えたのは、シイタケとクリタケとヒラタケとナメコとエノキで、使ったのがシイタケ、クリタケ、ヒラタケの方がコナラで、ナメコとエノキはアズキナシ、サクラを使いました。菌打ち仮伏せは落ち葉をかけたようですね。

(一同笑い) 本伏せはヒラタケとナメコとエノキは3分の1くらい土に埋めていますが、シイタケ、クリタケは本伏せのやり方が違って、シイタケは組み直しています。

川嶋 シイタケこちらです。

道広 こちらだそうです、はい。

菅原 それじゃあ場所をはっきりさせるために、クリタケを持ってる方どなたですか。クリタケを持ってる人、クリタケ。そこをお願いします。

川嶋 10本ずつ置いてあるんですけども。

菅原 だいたいそこがクリタケです。

川嶋 そこがクリタケです。

菅原 ヒラタケを持ってる方いますか。

女性A はい。

女性B ナメタケはどこ。

菅原 ナメタケ、ナメタケはこちらです。お願いします。

男性 ナメタケってのはナメコを言ってるんですか。

菅原 はい。

男性 それともこのエノキダケを言ってるんですか。

菅原 (苦笑) ナメコです。ヒラタケは？。

川嶋 ヒラタケ。

菅原 お願いします。ナメコ。

男性 エノキダケのことナメタケっていうんだ。

菅原 ああ、そうなんですか。あとエノキはどなたが。あとシイタケはそこら辺ですか。

浪花 ちょっとご覧下さい。我われが残したツル植物のうちのひとつです。はいこれ名前分かる人。

(一同ざわざわ)

浪花 ツル植物です、ヒント、ツル植物です。

川嶋 (笑い)

浪花 なんかこの実と実の周りの姿がなにかの他の植物に似てます。

(一同ざわざわ)

浪花 何となくこれがあのウメの花っぽい感じしません？

栗田 強引だなあ。

(一同笑い)

浪花 先にもう答え言っちゃいますね。ツルウメモドキです、はい。特徴はですね、この実の周りについているこの殻なんですけれども、その殻の開き方が、3枚なんですけれども、まるでウメの花が咲いたようになるのでツルウメモドキといいます。これはリースなんかにかくとすごくきれいな訳です。

道広・亀山 ほおー。

菅原 すごくきれいですよね。

道広・亀山 ほおー。

浪花 ツルウメモドキ誰かいません、はい。

(一同ざわざわ 移動)

浪花 ニシキギ、この幹の周りに羽みたいなべらべらがついてるんですね。これがまるで錦を飾ったようだ、という説もありますし、秋ぐらいにすごくきれいな紅い紅葉になるんですね。それで、錦のようだ

からニシキギという説があります。すごくきれいな灌木です。

道広・亀山 ほおー。

早稲田 お前らが感心してどうするんだよ。

道広 サクラサクラ。

菅原 オオバボダイジュ持ってる人。

道広 勉強になるなあ。

浪花 はいこれ、オオバボダイジュです。シナの親戚なんですけれども、見分け方はですねえ、葉っぱが大きくて、シナと同じような葉っぱなんですけれども、裏にふさふさというかピロードのような薄い毛が生えています。

男性 これシナノキ？

(一同笑い)

浪花 あったったった。

男性 これもシナ？

浪花 ブドウっぽい感じがするな。

男性 これもシナノキ？

浪花 これシナですね。はい、すいません。

菅原 アサダは。

浪花 時間切れです。

菅原 時間切れですか。アサダ持ってる人いますか。

(一同ざわざわ)

亀山 なんか気持ちいい。

浪花 はい、アサダの葉っぱさわってみて下さい。すごく気持ちいいです。ナマで触るとゾクゾクするくらい気持ちいいです。

道広 するんですか。

浪花 するんです。怪しい趣味。

道広 時間無いから。

川嶋 あそこに2本あるんですけど。

浪花 置いてこうか。

(一同移動)

浪花 じゃあテーマソングを演奏しますので、みなさんステージの方にお越し下さい。

(一同ざわざわ)

菅原 今ちょっと演奏の準備をしますので、それまでの間僕らが活動してた活動記録がありますからそれを。

(一同ざわざわ)

菅原 だいたいいつもこんな感じでやっています。北大祭に出たり。

(一同ざわざわ)

早稲田 知らないぞ、俺なんかぶっつけ本番だぞ。

道広 早稲田さんこっち。

早稲田 あれ場所決まってんの。

浪花 すいませんご注目下さい。みんなでよく焚き火を囲みながら演奏した曲を三部合奏でお送りしたいと思います。

早稲田 誰が指揮するの。

道広 あたし。

早稲田 は？

道広 あたしが出だしの音やるの。

北大チーム (リコーダー演奏)

(一同拍手、鳴りやまず)

草苺 ありがとうございます。

昼食会と講評(ケアセンターに戻って)

コーディネーター ではこれから焼き肉などで昼食会をしながら、講評と意見交換を進めます。最初に、乾杯をいたしましょう。斉藤一彦さんをお願いします。

斉藤 養蜂をしております斉藤です。わたしの商売上の素晴らしい蜜源ができてくるなあと、こう思って感心して聞いておりました。来年もさらにみなさんの希望が大きくなりまますように、乾杯します。乾杯！。(カンパーイ！！)

コーディネーター 今日はコメンテーターには専門の立場から合計6カ所をご覧いただいた訳ですが、これからそのご感想をお一人ずついただきたいと思います。そのあと泉所長に代表していただいて表彰に入っていきたいと思います。では、お一方ずつ講評をいただきたいと思います。

泉 それでは講評させていただきますけれども、6件の方々とも、この2年間通われて大変熱心にやられたことが良くわかりました。わたしは林業的な立場、雑木林あるいは広葉樹林を育てるとい立場から見させていただいたことをお話ししたいと思います。

今回それぞれが選んだ場所、あつた場所によっても木ダネとかいい木、悪い木とありますが、たて木(将来のために残す木)にするべき木が多かったチームと、どの木をたて木にしたらいいかどうか苦しむような林に挑戦されたチームがあったような気がして、そういう意味で必ずしも公平なコメントはできないなあという感じを持っております。

特に北大チームの林は、たて木を選ぶには、こういっては何ですが「不適切な林」を選ばれた*(一同爆笑)のために、相当一生懸命やられたんですけども林業的な広葉樹林を育てるとい意味では大変むずかしい作業をされたのかなという感じをしております。それから苫東地区森林愛護組合、いぶり雑木林懇話会のところは、比較的成長が良いといい

ますか、ナラですとかカバですか、たて木としてある程度みえているような林で、そういう意味ではやりやすい林だったのではないかな、という感じもしております。

*事務局注：チェーンソーが使えるかや体力、などに応じていわば適当に割り当てたもの。レディースの所は女性も子供も持ちやすい太さの林、愛護やいぶりは大木の混じる4, 50年生と言うように。北大の所は手前が貧弱で奥が壮齡林。課題がふたつあるむずかしいところを割り当てています。

苫小牧レクリエーション協会、レディースネットワーク、札幌雑木林ファンクラブのこの辺が手を加えてどうしたらいいかという形の中では、一番取り組むにはおもしろい林が当たったのかなあと言う感じがいたします。

その中でも、ツルの管理ですとか、たて木以外を全部伐っていくんじゃなくて、中層木、下層木をどういう風に取り扱ったかということで見させていただいたところでは、レディースネットワークの方々がこの辺うまくやっており、わたしは特に感心しました。

最初2500本くらいあったものを1500本くらいに落とすということだったようですが、第1段階としてはいっぺんに2年間で落とすのは大変だったのではないかと思いますですね。それで群状にある程度かたまりかたまりで考えながら、中層木、下層木を一体に残しながらやっているということですね。萌芽枝と言うんですが、中層木を伐ってしまうと、横からどうしても芽が出ちゃうんですね。萌芽枝を出させると材にある程度の欠陥が出るんですけども、中層木をうまく残すと萌芽枝が出るのを抑えることができる。その萌芽枝を抑える施業ということで特に卓越していたなあと思ったのはレディースネットワークの方々でした。

中層木の残し方、下層木の配置、それから木材の利用という面でも木の葉っぱまでたき火に上手に使われています。大体、カシワの葉っぱというのを昔の方はたき木の材料に使って、ご飯を炊く材料のカシフといったことからカシワという名前が付いたといひます。カシワの葉っぱはとても大切だったようですね。昔の里山をうまく利用する上では、カシワの葉っぱや木の葉っぱをどのように上手に利用するかという点でもレディースネットワークはうまくやられていたのではないかと思います。

またリースづくりとか家族で楽しむ努力をされて、お子さまがたくさんできた（笑い）という素晴らしいほこりもこれに勝るものはありません。昔からわたしたち林業屋では、トドマツとかエゾマツはどちらかという男性にたとえるんですよ。それから、広葉樹、雑木の方は多様でナイーブで育て方によっては素晴らしい美しい林になるというか、まさに女性的である。レディースネットワークの方は、女性である特色をうまく発揮されて森づくりに挑戦され、広葉樹の森をうまく育てられたなあという風な感じをわたしは受けました。以上でございます。

コーディネーター ありがとうございます。では青井先生お願いします。

青井 どうもご苦労様です。わたしは野生生物の生息環境という観点に重きをおいて見さ

せていただきました。ですから、先ほどの所長さんの森づくりの意見とはかなり違うところがあるかと思います。やっぱり見た目にいい森と野生生物の生息に適した森というのはなかなか一致しないと思います。きれいなところが必ずしもいい森とはならない。これはもう宿命みたいなものですね。特にほとんどのグループが一番力を注いでいるのは森をきれいにすること、腐った立木をきれいにすることに重きを置いておられました。

見た目はきれいな林のなるのですが、残念なことにそういった腐った木には非常に多くの虫か、それをいろんな鳥が採餌場にするということ、もちろんツル植物、ご存じのように色んな木の実がなります。枯れ木、見た目に良くないものというのは野生生物には欠かせないものなんですね。

ですから一応かなり相反するところがあるんですけども、そのどこもきれいにしてしまうと問題ですけども、一番好ましいのはそういうきれいに整頓したところと雑然とした枯れ木もツルもあるところ、もう少し樹齢がたったところがあるという、そういう多様なパッチが混在するところというのは、今までの研究で野生生物の生息密度が高いというアメリカなんかの報告があります。だから、どれが一番いいと言うことではないんですね。一番大事なのはいろいろな多様なパッチを組み合わせると言うことになろうかと思います。

ですからみなさんの今日までやった所が、よりきれいな所もありましたし、北大チームのように今申し上げたような観点でツルなんかを残した箇所もありますので、そういう所が適度に配置されているという意味におきましては、全体として考えると、野生生物の環境としては良くなっているのではないかと思います。

そのような中でも、ひとつひとつのパッチで見ますと、割と枯れ木を残していたいぶり雑木林懇話会は見目はきれいに見えませんが、かえて動物にとっては利用価値がある。そして北大チームはもともとそういう観点をやっていたので、特にその点では評価できるのではないかと思います。

しかしいずれにしても、いろいろな環境が混ざり合っているということが肝要ですから、そういう意味では今回の6とおりのいろいろなものが混ざり合ってそれから手の付いていないブッシュ状の林が道路の反対側にあるということは、非常に多様な環境がこのエリアにできたのではないかと、言えると思います。

コーディネーター ありがとうございます。人と林ということでは、身近なところでお話を伺える方があまりいらっしゃらないと思うんですけど、今回ちょっとした縁から精神科医の滝沢先生にそういう関わり合いをしていただけるようになりました。滝沢さんは本州の方でも雑木林との関係をお持ちのようでしたら、精神的に障害を持っておられる方の森回りなどもはじめられて、ようやくそういうステップに入られたと伺っています。

それから、申し上げていいですか（笑い・本人から承諾）森林インストラクターの資格を精神科の先生がとられるというのが大変おもしろいというか、興味があります。試験は

もうひとつあるんですね（本人に確認）、目下それにも取り組まれていまして是非応援したいなあ、と思っています。では滝沢さん、お願いします。

滝沢 どうもご紹介にあずかりました滝沢です。森林インストラクターの試験は一次試験が通っただけで、2次試験はこれからになります。わたしは本で知った知識だけで、フィールドでの実体験がないので、インストラクターとして働けることはないと思うんですけども、一応そういうことに興味を持って試験を受けてみました。

で、今日のみなさまの雑木林の評価をしなければいけないということなんですけれども、そもそも精神科というのが評価するのがむずかしい分野で、一概に数学的に統計的に評価をしない姿勢を持っていますから、今日はちょっと苦労なんですけれどもそれなりにお話だけをさせていただこうと思っています。

精神科という仕事をしていますとどうしても人の話を聞く仕事になりますので、森を見るよりも、みなさまの「言い訳」と言いますか、どういう風にこの森に向かってきたのだろうと言うことを聞く方にどうしても主眼をおいてしまいがちなのでそういった話になると思います。

一貫してみなさま、忙しい中を足繁く通って手入れされているということで、非常に頭の下がる思いで聞いておりました。特に印象に残ったのが、あとで伺ったんですけど臨月まで、お腹が大きくなっても森にいつてらっしゃったということです。多分森にとってはそうやって人が入ることが必要であるとともに、人間にとっても森の存在が必要であったのだと思います。午前中も言いましたが、癒されるとか、子宝まで授かっているということにもものすごく感動しました。

レディスネットワークのそういう総合的な結びつきが強いような印象を受けています。ほかの方もリストラだとか（笑い）、森に携わる方々の物語が存在するような気がして、それをただただ感心して聞いていました。

そういう生活苦を背負っていない北大チームの森というのが見た感じも楽しくて遊びの要素が多くて、いろいろな道具を使って楽しめるようになっていきます。是非、当園でもあの施設を使わせていただきたいくらい、楽しい場所であったと思います。

あと、みなさん、いろんな思いで森と関わっているということで、「植物の神秘生活」という本をお読みなった方がいらっしゃればご存じかと思いますが、人が話しかけたり、音楽を聞かせてあげたり、いろんな人間が話しかけることによって、植物の生長が変わっていったり、植物自身の出す、何か、エネルギーというか波長というか、そういうものも変わっていくという話があったんですけども、みなさまがこう思い入っていると森の林相というのも変わっていくような気がして、それぞれ6カ所、いろんな特色があるように思いました。以上です。

コーディネーター 大変興味深いお話を伺ったと思います。それで、今の話にありましたようにひとつひとつにユニークな発想と行動があったということで、一般的に優劣は基本的にないわけですが、ただちょっとそれでは花がないんじゃないかというご批判もあろう

かと思いますので、先ほど冒頭で紹介しましたとおりコメンテーターのお三方で打ち合わせをしていただきました。それで予めお断り申し上げますけれども優劣は基本的にございません。何となくシンパというか、この林に何となく心惹かれるなあと、そういう個人的なご感想をいただくことにして票とりをいたしまして、特選と準特選を選ばせてもらいました。それでは発表します。まず特選です。泉所長、お願いします。

泉 特選はですね、「レディスネットワーク21」に決まりました。(拍手)

コーディネーター レディスには(袋に書いてある)青森産うるち玄米ではなくて(笑い)、苦東産の木炭が記念に贈られます。(拍手)

泉 大変一生懸命やられたと言うことで、準特選は北大チームです。(ワー、と歓声と拍手)

コーディネーター (記念品の袋が)ログの2Fにあったビニール袋そのままで思い切りお粗末で悪いですけど(笑い)、ハイ、おめでとうございました。ではこれから、受賞の喜びを語っていただきます。

レディス・濱田 わたしの元の職場の方に賞をいただいて、これも詐欺じゃないかって(笑い)言われそうですけど。ええとこの子が雑木林で育った子で、当初の子供達とかお母さん達とか、ある程度、そういう世代に自分がいて、だからおなじょうな境遇の、いつ子供が産まれてくるか分からないと言う方がたくさん来てくれたので、そういう中で森とかかわることができたということが、とても良いことなんだなというか、とても大切なんだな、必要なんだなということが自分自身実践できて、みなさんにもそう思っていたんだなということで、非常にうれしく思っています。

だから北大チームくらいの人たちが、あと10年もたてば、もっとすごい子連れ状態になって(笑い)、続けていただきたいなということで、なかなか0000000000。

コーディネーター ありがとうございます。それでは準特選の北大チーム、浪花さんどうぞ。

浪花 ありがとうございます。林としては、3つに分けた内の手前の所が、非常に発達が良くなかったので悪い木を伐っていこうと伐っていき、気がついたら半分以上木がなくなってしまうと、一時期どうしようかなと思ってすごく悩んでいた時期がありました。でもぼくらの活動がすごく変わり始めたなと言う時期がありまして、それは去年の冬あたりから学生のみなさんが森の手入れもそうなんですけど、いろんな形でいろんな森のあそびに取り組んで頑張ってるから、活動も楽しくなったし、その森の手入れということではイマイチだったかもしれないけど、すごく楽しい空間が創れたと思います。

そういう意味では学生のみなさんの自由な発想あつての北大チームだと思いますので、身内なんですけどこの場を借りてお礼を言いたいと思います。これからも遊んでいきますし、みなさんもどんどん遊びに来てくれるような林を創っていきたいと思っています。(拍手)

コーディネーター ありがとうございます。育林コンペの第1ステージ、予定どおり1999年の11月に終了いたしました。先にご案内のとおり90%の確立で12月から新

しい土地の貸借関係といいますが、立ち入りの関係がコンペのエリアでできつつあります。従いまして今のところこのまま作業を続けていくという風にご理解をいただきたいと思えます。

それから苦小牧という土地柄からみますと割と産業という方のダイナミック性は高いところがございますけれども、やはりこういう場所がたくさんあるということも苦小牧の魅力のひとつです。ただそのところがどうもまだ満度に評価されていないところがございまして、みなさまのおうちに帰られたり町内会に行かれたりそういう生活の中にも折りに触れてこういう緑のことも周りの方々に広めていただければいいなと思えます。苦小牧のこの雑木林関連は道新さんが割とフォローしてくれて全道的に報道してくれるんですが、残念ながら地元の方のリアクションというのが少ないというのが現状です。そんなこともございましてとりあえず興味のある方にどんどん入ってきていただいて、あ、そんなものかなと、逆にそのそばの人に広報できるような格好にもっていければなあと思っております。

それから、こういう風に導かれてきた原因のひとつに、今、大学の教職の仕事を退かれた石城先生が、かつて「苦東の緑地は都市林だ」というようなことをいろいろな方に少しずつおっしゃられていたというようなことが、契機にもなっています。明かしてみるとですね。それは石城先生はヨーロッパのいろいろな都市林をご覧になって演習林というものが都市林であるという風におっしゃいますけれども、その延長線上にやはり工業との関わりのあるこういうところ（苦東の緩衝緑地）もやはり都市林のひとつだということなので、新しい勇気を与えられた時期がございました。そのような系譜の中でこの緑地も生きていますので、雑木林の取り扱いをめぐるノンポリとしてどこかとひょっとしたら勝負しなければいけない事態とか、時代とかがあるいは来るかもしれませんが、そういう時期がもし来ましたら、署名だとかの何だとか（笑い）あるかも知れません。これは半分冗談ですが、そんなときはよろしくと申し上げて、とりあえず2年間の育林コンペを締めくくらせていただきます。

次の育林コンペに向けましては、また、エネルギーを貯めていただけるようお願いしたいと思います。どうもありがとうございました。

あとは予定がありませんが、何かしゃべりたいという方、言い足りなかった方、どうぞこの記録のマイクの前でお話下さい。

青井

ちょっと別の話なんですけど、知っている人は知っていると思うんですが、今、演習林の方でヒグマを一頭追跡してるんですね。早稲田がずっと頑張っていてトラジローという名前をつけて、今からぼくも追跡にいくんですけど、実はあのトラジローが毎年春になって決まって行くところがあるんですよ。そこはどこかといいますと、千歳空港の滑走路南端の湿原なんですね。大体連休の頃なんですけど、去年、今年と、冬眠するのは白老の山のてっぺんなんですけど、目が覚めたら一直線に千歳空港の滑走路を目指す、そういう行動

が見られました。そういうことを調べている内に、千歳空港の滑走路延長問題が出てきました。あそこを500m苫小牧側に延長させるということで、ちょうどトラジローが利用している場所がつぶれてしまうんですね。

ウトナイ湖のレンジャーの村井さんという方がいらっしゃいますけど、その方も、千歳空港の24時間運用問題とか今回の滑走路の問題、その前は千歳川放水路問題で、この近辺の森林にいろいろな活動に関わってきておられる方ですけど、今回、その滑走路の問題も含めて、このトラジローが利用してきた（この森も利用してたんですよ。この辺を言ったり来たり）近辺の森林に関わる人たちのネットワークを創ろうではないかということで、わたしのところとウトナイと、それからこの苫東の森、これは草薙さんにさんかしてもらうんですけど、それから鷓川のシシャモの森の...と言う会があるんですね。そういった近間でいろんな森と地域の問題と関わっている人たちのネットワーク、称してトラジローの森ネットワークという名前で（笑い）、近々正式に発足することになりそうです。

それは参加自由ですので発足の暁にはみなさんも是非参加いただいてこの地域の森をどう考えるかというあたりの議論を深めていければと思っています。トラジローの森とわざわざ名前を付けたのは、彼が胆振と日高の間を言ったり来たりしているということがわかった訳ですね。それがこういう残された森をうまく使って人目に付かず移動している。こういう通路という意味でコリドーといいますけれども、苫東の森が胆振と日高の野生動物のきわめて重要なコリドーだということが分かってきたわけですね。彼がそのことを教えてくれたということで、トラジローの森ネットワークという名前を付けたんですけど、実際そういう意味ではここは非常に貴重な森林になっています。その辺が意外と理解されていないんですけども、単なるきれいな緑地があるな、というくらいに思われているかも知れませんが、実は北海道の野生生物のつながりを考えるとき、日高と胆振はほとんど分断されていますけれども、かろうじてこの森を通じて行き来ができていう意味では、非常に貴重な森ですので、そういう観点を含めて森のことをみなさんで考えて欲しいと思いますので、ネットワークが立ち上がった際（年明けぐらいになると思いますが）には、是非みなさんもお参加いただけたらと思いますのでよろしくお願ひいたします。（拍手）

コーディネーター

えー。早稲田さん、厚沢部からの報告などいいですか？では札幌の雑木林ファンクラブから来られている方を代表して馬場さん、何かひとことお願いします。

馬場 札幌から孫田さんのあとをついてやってきました。今日は森林の最後の手入れをする日だと思って、ノコなど準備して来たんですけども、作業をしなくて焼き肉をいただけると言うことで驚いています（笑い）。ぼくたちも中途から参加してそのたびにバラバラだったんですけども人の出会いができて、非常に楽しく間伐などさせていただきました。また孫田さんが最近忙しくなりまして引力が欠けましてご無沙汰してたんですけど、孫田さん次第ではないかと思っています（笑い）。

札幌でカッコウの里を語る会、孫田さんを含め7人くらいで立ち上げました。それで札

幌近郊の里山なり、自然を大事にしていこう、以下に里山に関わっていくかということをやっております。会員も立派な会員ばかりではございませんですけども、30人くらいになりました。この苫東の森がきっかけのようなものですから、こちらの方も孫田さんが引力があればこっちに来ますけれども札幌のほうも活動しようと思っていますので今後ともよろしくお願ひしたいと思ひます。

コーディネーター それではちょっとファミリーを代表しまして感想をいただきたいんですが、ピザを焼いて下さっている富永さんのお父さん。もうずっと、ピザなら任せとけ！、っていう感じです。

富永 苫東地区森林愛護組合の方へ去年から入れていただきました。実際の作業は3回くらいだったと思ひます。この辺で遊ぶことが多く、ケアセンターの前でピザを焼いたり、バーベキューをしたりという回数が多かったと思ひます。北大の学生さんもそうですが、井家さんというファミリーと一緒に何回か泊まったりもしました。子供と一緒に遊べる時期は限られていると思ひますので、子供が小さい内に遊べるだけ遊ぼうという気持ちで参加させていただきました。これからも機会あるごとに参加したいと思ひます。(拍手)

コーディネーター ありがとうございます。ここで育林コンペに参加した核グループの代表の方から一言ずつコメントをいただきましょう。苫小牧レクリエーション協会の椿さんからどうぞ。

椿 もうひとり来ていたのですが仕事で呼び出されて、コンペ始まって5分で帰ってしまい一人だけ残っています。来年もまたできるようなので是非引き続きここにアソビに来たいと思ひます。今日は後ろの方に今年新着のレクリエーション道具を持ってきましたので、食事のあと、腹ごなしに新しいアソビを覚えていただけたらと思ひます。ありがとうございました。

レディスネットの助っ人・井上 選木なんかは女性ができるんですけど、力仕事になると男性群の出番なのかなということで、家族みんなで行ったら楽しいのかなという気がしています。レディスの所がきれいだったというのは、意識してヤマモミジを残してきたせいかなと思ひます。小さな木も選ぶのは結構大変でした。迷ったので残したというものもありました。これからもできるのであせって伐る必要はないのかな、今後も少しずつ手をかけていく感じでやっていけばいいと思ひます。結構内輪でやってた時も昼頃になると食べる方がメインになってしまつて、大体午後は仕事をしなかったんですけど、やっぱり年に数回は集中してやる機会があればいい山ができるのかなあ、という気がしています。

今、喜茂別にいるんですけど、こういう山が近くにあったら気軽に来れるんじゃないかと思ひます。レディスはまだ募集しているようなので北大から来た女性の方はすかさずレディスの方に回つて下さい(笑い) あと男性も多少募集しています。よろしくお願ひします。(笑い・拍手)

孫田 先ほどもお話しした孫田です。今日は苫小牧なんですけど札幌の商業もやっておきたいと思ひます。馬場さんも話してましたけど札幌にもこんな集まりがありまして、

わたしたちがやってると言いましたカッコウの里山の会...、これは残念ながら山を持ってなくてもっばら歩いてみたりあるいはゴミ拾いをしたりという活動が主になっています。あと今、これはお金がかかるんですけども、札幌で常盤里山クラブというのがあるんですね。自由学校「遊」が主催してやってるんですけども、常盤で3haほどの林を借りて間伐をしたり畑をおこしたりあるいはキノコの菌を植えたりそんなことをやっています。年間会費5000円なんですけど大体毎月1回ぐらいの割合で活動しています。それから林と直接関係ないんですが、スコップクラブというのをやっていてそれはもともと公園にする予定だったところを地域のお母さん達が集まって是非自然に帰りたいということで、北海道工業大学の岡村先生が始められた生態学的混播法という方法で自分たちで苗木を作ってまた来年から植えていこうということになっています。あと最近では八剣山の麓でもなにかそんなのやってると言うのを新聞に出ていました。札幌でも色んなことをやっています。それから帯広にいくとエゾリスの会というのがあって、帯広の森を使いながら間伐とか色んなことをやっています。色んな情報を流したいと思いますのでみなさんから情報をいただきたいと思います。なるべくそういうのをネットワーク化していかないと、なかなか広がっていかないな。実は札幌のそういうグループも絶対数は少なくてオーバーラップして色んな会に入ってるという状態です。ですから今日も札幌からもっと人が来る予定でしたがほかの会があって来れなかった方が何人かいらっしゃいます。少しずつ輪を広げて色んな会に顔を出すのも必要だろうし仲間を引き込むということも必要になってきます。是非そんなことで情報が欲しければわたしの方に連絡をいただければと思います。emailでもfaxでも結構です。よろしくお願ひします。

コーディネーター 全然違う話をさせていただきますが、わたしの方は、こんな風なことを淡々とホームページの中に取り込んでいけば庭のガーデニングと林のガーデニングの2本立てのホームページを作っているんですが、その中の林の部分に大変良くアクセスしてくれるロンドンの女性の方がいらっしゃるんです。この方は佐藤まり子さんという方で、green tea time というホームページを持っておられるんですね。わたしは英国のBTCVに興味をもっておりましたところ、彼女はロンドンなどで自分が体験されたBTCVの活動を連続して紹介してくれていました。大変おもしろいドキュメントのようなんですが、このホームページにアクセスしておりましたら、彼女の方もわたしのホームページの方に顔を出していて、BTCVの活動から見ると、苫小牧のこの活動ははるかに血肉になるようなおもしろい活動に見える、というようなことをおっしゃっております。それはBTCVが職業訓練のようなものを半分にらみながら進んできたということもありまして、その歴史があってシステムチックに動いている、その中の活動がわたしが考えていたよりも実際はもっと固苦しいものに近いというお話です。詳しいことはその中を見ていただくいいんですけども、どうも地元でスポットライトを浴びないながら淡々とやっているこういう活動をわたしたちはそれなりに楽しんでいますが、そういう遠いところで見ておられる方もいらっしゃって応援してしばしばアクセスしてくれると言うわけです。わた

しのホームページの広場の所にはその佐藤さんのお便りも貼り付けてありますので、機会がありましたらご覧いただきたいと思います。

では、いぶり雑木林懇話会代表の本田さんが所要でさきほど帰られたので、次、北大の方。

浪花 北大チームからはこれまでの活動をすごく支えてくれ活動のとりまとめをしてくれた3人を紹介したいと思います。まず立ち上げの段階で頑張ってくれた早稲田さん、(拍手) 2代目の事務局長で院生生活をこの雑木林に捧げてくれた栗田さん(笑い)、そして現役の事務局長で色んなアソビをこの林でやることで活動のは場を広げてくれた菅原さんです。良かったら3人の方、一言ずつお願いします。

早稲田 最初から関わっていたんですが、今、実は今年の春から道南の厚沢部町という所に移りまして、ヒグマの調査の仕事をそちらでしています。向こうに移ってこっちにきてあらためて思うんですけど、本当に平らでこれだけ人が入れる林というのは向こうにはないんですね。もう、ガケみたいな所ばかりで、これだけ親しんで入れる林が身近にあるというのがすごくうらやましいと思います。ただ、道南に行ってみて逆にそこにある面白さ、たとえば山菜が多いとかクマが多いというのもありますけれども、そういう地域地域の特徴があって今それを自分は道南で探していこうと思っているんですけど、そういうものを活かしてやっていけたらと思います。自分は無事今年から就職できたんですけど、こちらは決まっていなくても知れないんで、またよろしくお願いします。

栗田 2代目のまとめ役をさせていただきました。ぼくも大学3年まではテニスをたしなむ都会的なセンスでやって端ですけど(笑い)、すっかりこんなになってしまいました(笑い)。大学も後半はほかのことにも目を向けてみようと思っていたので、湖の会に参加できてすごい勉強になったと思います。今後とも人の輪を大事にしたいと思っていますので、いろいろよろしくお願いします。ちなみに来年からは林業改良指導員に合格していたのでそっちの方に行こうかなと思っていますのでよろしくお願いします。(笑い・拍手)

菅原 3代目ということになるんでしょうか。栗田君のあとで北大チームのとりまとめをした菅原です。ボクは入った頃から施業なんかしないでひたすら遊ぶことばかり追求していたので3枚目みたいな役柄でやってていいんじゃないかとおもってたんですけど、ボクも森の中で遊べる、ちょうど今日みんな付けている手ぬぐいに書いてあるんですけど「遊食森寝」、この前考えたんですけど、遊んで食べて森の中で寝ると、之を追求してそうやって身近なところで森を考えて行かないといけないかなと感じてましたのでこの会に参加しています。ボクはあと1年くらい大学にいますので、今後顔を合わせるとしますのでその時はよろしく。菅原でした。(拍手)

浪花 北大チームにもう一人いるんです。いろいろ指導してくれた及川さんが来られているので。

コーディネーター はい、どうぞ。及川さんから一言願います。

及川 はじめまして。昨年ちょこっとやってるのをみてて学生さんの熱心さについてのめりこんだっていうか、浪花さんが一生懸命リーダー格でやってられたんで、一応フォローで

できればなっていうか、お手伝いできればな、ということから始まりました。あとはちえんそーはお任せ下さい、お手のものかと思っていたんですけども、実際に山に入ってみると林相のいいところと悪いところと、うちらも演習林もそういうところ多いんで、ツルはもう木の名前から始まってとにかく自分で調査しろ、ということでもまず赤テープをつけてそういうやり方から始まって自分も教えられた面がたくさんありまして、学生さんの知らないながらも真剣に取り組むって言うか、ノコの使い方でもチェーンソーでも初めて使って真剣にやる。フツウの女性ならわたしできないわ、っていう感じにいるんだけど、やっぱりここに来たらやらねばならんという覚悟できてるみたいで、本当に女性、男性にかかわらずやってくれたという、木の種類も、今日みたいに出し物というか、考え方って言うか、能力を活かしてやれるものは出してやるべきだと思うし、我々、能力がないばかりにそういうものを見るとようようたる??ものでやっぱり目新しく見えるし、我々も違う面で見れることもある。

今日、ほかのチームの話、手入れの仕方、演習林のチームよりずっと手入れが行き届いて演習林が準特選ということはあるえなかったのだと思うけれど、最後の締めくくったあたりで点数あげたんでないかと思えます。本田さんあたりが精魂込めてやっていたあたりはプロですし、僕らもなるほどなということだから演習林の手入れの仕方もいいのか悪いのか、試行錯誤してやってきているみたいに、10年、20年、みとどけるかという、この山で見届けられない面もあるし、試行錯誤氏ながらやっている所も多くて、低木、中木、高木を含めて野生生物も含めてものごと考え方という幅広く考えられるということ、ここへきて、草苺さんのあの力添えというか力というのは相当なものだな、こういう学生さんをまとめれる、ほかのみんなも集められる力というのはなくてはならない存在だと思います。そういうことで期待して僕らも協力してできればと思いますのでよろしく。

コーディネーター ありがとうございます。思いがけないところで、ほめ言葉をいただき恐縮でございます。締めくくりにはちょっとお願いします。今日の10時半からお話しいただいた内容は、先ほどご紹介いたしましたように冊子にします。今の感じで行けば、A4版で25pぐらいにいったかなという感じでございます。120分テープを今そろそろ2本目が終わる頃に来ています。そこで1本目は北大の学生さんチームに今日預けますので手分けして何とかテープおこしにご協力いただきたいと勝手に決めてお願いしてしまいます。それは3代目のリーダーの菅原さんの方によろしくというふうに預けます。2本目はわたしが持って帰って活字に起こします。できるだけ速やかに起こすようにして、それで目標25pの冊子にしたいなと思えます。ご協力いただいた方、今日お集まりいただいた方には、基本的にお配りできるようにしたいと思えます。

と言うわけでございます。今しゃべると冊子になるということがございますのでどうぞ。もうひとつお願いしたいのは先に各グループのリーダーの方には、事前にお話しいただくフォームを差し上げてございますのでそれは長さはいくらでもいいですから埋めていただいてわたしの所に12月一杯を目途にお送りいただきたいと思えます。

折角の宴会の最中、話がずーっと長くなりましたけれど、あといいですか。それではテープを止めます。お疲れさまでした。ありがとうございました。

完